HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	生徒の声から見える「本物の体験」の真価 : 市立札幌大通高校におけるプロジェクト学習の歩みをたどり直す
Author(s)	西野, 功泰
Citation	公教育システム研究, 22, 131-168
Issue Date	2023-10-16
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90615
Type	bulletin (article)
File Information	050_AA11562857_22.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜特別寄稿＞

生徒の声から見える「本物の体験」の真価
―市立札幌大通高校におけるプロジェクト学習の歩みをたどり直す―

西野　功泰*

目　　次

はじめに
第 1 章　これまでの実践を語りなおす
　第 1 節　ミツバチプロジェクト
　第 2 節　キャリア探究
　第 3 節　高校生チャレンジグルメコンテスト
第 2 章 生徒の語りを聴く
　第 1 節　ミツバチプロジェクトの持つ意味とは？
　第 2 節　キャリア探究のアニマドーレ
　第 3 節　チャレンジグルメと地域
おわりに

【キーワード】体験学習、探究、教師の役割、つながり、省察

はじめに

私は 17 年間の教師生活を経て、現在は札幌市の教育行政職員として勤務している。この転身により、私の役割は生徒の成長発達を支え促す教育実践から、そうした教育実践を行う学校や教職員を支え促し発展させる役割へと変化した。しかし、高校教師としての経験は、省察を繰り返す中で自分の財産となり、現在の仕事の原動力になっている。

以前勤務していた市立札幌大通高等学校（以下、「大通高校」）では、開校当初からキャリア教育に力を入れていた。キャリア教育という文言が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、平成 11 年 12 月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてである。

キャリアの語源は、ラテン語で「轍」（過去−現在−未来）を意味する。進路指導と聞くと、どうしても先のこと、未来ばかりに頭が行きがちだが、将来を思い描く際には、一度立ち止まって自分の辿ってきた過去を省察し、現在の立ち位置を確認する時間も大切である。この過去−現在を見つめ直すことで、漠然としていた未来を具体的な目的を持って思い描くことができるようになるのではないだろうか。

* 札幌市教育委員会 指導主事（高等学校担当係長）。2009 年 4 月～2021 年 3 月、市立札幌大通高等学校教諭。

こうしたことを、学校生活の至る所で生徒たちに話すと、俯いていた顔が少しあがり、こちらの話に耳を傾けてくれたのである。

教育委員会に異動して3年の月日が流れた。慣れない仕事の中で、これまでの教師としての経験やプライドを一旦端におきながらも、仕事の判断や決断に対しては、今もなお「何のために」と問うことを以前にまして強く意識するようになった。

今思い返すと、40歳を目前とした数年前に、自分の中に揺るぎない軸が欲しくなり大学院に修学した。

自分の中に揺るぎない軸を持つことで、道に迷わないように、知らない場所や初めてのことで戸惑ったとしても、選択を誤ることがないように、そして、力強く前に進んでいける自分になるために、どこからでも確認できる自分の軸を持たなくてはと思った。より自分自身を理解したいと思った。広い世界を知って、自らの実践の意味を捉え直し、意味付けたいと思った。その時から少しでも世の中のために歩み続けたいと思っている。

私は福井大学連合教職大学院で、目的に向かって突き進む人たちに出会った。時にその背中を追いかけてみると、行き着く先にはみたこともない世界が拡がっていた。想像したこともない世界だった。知らないことは恐ろしいことであり、知ることは人生を豊にするということを改めて学んだ。ぼんやりと生きていたら気がつけないことばかりだった。

日常生活の中でどれだけの問題や課題があるだろうか。私は北海道で生まれ育った。飢え死にしそうになったことも路上生活を余儀なくされたことも今のところない。誰かに命を狙われていると感じたこともない。

しかし、そんな暢気でいた私に、2018年（平成30）年9月に起きた、胆振東部地震、そして2020年から様々な制約が長期間余儀なくされたコロナ禍は多くのことを教えてくれた。あの時は問題や課題が山積していた。いや、あの時の問題や課題は、普段は身を潜めていただけで、震災やコロナ禍をきっかけとして姿を現しただけなのだ。環境のこと、地域のこと、家族のこと、コミュニティのこと…。その時身を持って感じた。今までの生活は当たり前ではないということを。そして、こう思ったのだ。問題や課題を自ら発見し、事前に構えをつくっておくことが大切であるということを。

現在はものがそこら中に溢れて過剰な状態だ。未来は予測しにくい時代となった。人口推計ですら当たらない時代だ。そもそも予測しようとすること自体無謀と感じる。我々教師の役割も時代とともに変化してきた。そうした時代の中で、現在言われているのが、チョーク&トーク、ティーチング中心の教育から「課題解決型学習PBL、Project-Based Leaning」への転換である。すなわち知識・技術（コンテンツ）だけではなく、資質能力（コンピテンシー）も大切だということだ。教えられないものが指導要領に出現した。では、どのようにこれから生きていくうえで必要な資質能力を生徒たちに身につけさせるのかが課題である。

問題が希少化されると、問題解決能力ではなく、課題発見能力も大切になる。生徒に身に付けさせなければならない能力が変化して、21世紀型スキルが注目されている。そして様々な手法が新しく生まれているようにも見えるが、それらの多くは、新しいことでも珍しいことでもない。

私のこれまでの実践は、アクティブラーニングや探究学習の実践事例として紹介されることもあった。全く腑に落ちていない。私の実践は目の前の生徒の問題・課題解決を目的として取り組

んできた手段に過ぎないのであり、流行の実践をすることを目的としてきたわけではない。それらはすべてこれまでに巡り逢いし生徒たちや、私の実践を支えてきた同僚や職場、そして地域の人たちなどとの関係の中で導き出したものである。

一見問題のないように見える時代ではあるが、日々生徒たちと接する中で、「生きやすい世の中」だと思ったことは一度もない。常に目の前には問題や課題が山積している。目に見えるものもあれば、対話することによって見えるもの、見方を変えなければ見えないもの、ふとした瞬間に偶然見えるもの、同僚や他者から知らされるものなど様々である。

生徒たちとの一つ一つの出逢いが、私の教師としての歩みを進めてきた。日々生徒たちの物語に触れながら生活していると、当たり前とは何かわからなくなった。当たり前って一体何だろうと。

この報告は、大学院修学時に書いた長期実践研究報告書を再構成したものである。5 年前に長期実践研究報告書を書くことで、自分の教師としての北極星を捉え直す機会とした。北極星とは、まさに自分の中に存在する揺るがない軸である。私自身が教師として働く目的や意味を改めて見つけた。それまではひたすら実践、実践、実践の繰り返しだった。

なぜ大学院で学ぶ必要があったのか。それは、教師として仕事の価値を言語化し、取り組んできた実践を構造化することにあるからだった。

授業の中で生徒たちに「価値」を生み出すよう伝えきた。だからこそ生徒たちに関わる身近な大人として、価値を生み出すとはどういうことなのか、真摯に向き合いたかった。

第１章　これまでの実践を語りなおす

ここでは、以前に勤めていた「社会に近い、開かれた学校」である市立札幌大通高等学校（以下、「大通高校」とする。）で私が展開していた教育実践の歩みについて省察する。具体的には、ミツバチプロジェクト、キャリア探究、高校生チャレンジグルメコンテスト（以下、「チャレンジグルメ」）を取り上げる。札幌市は教育目標として「自立（自律）した札幌人」の育成を掲げている。

「自立（自律）した札幌人」とは、「①未来に向かって創造的に考え、主体的に行動する人」「②心豊かで自他を尊重し、共に高め合い、支え合う人」「③ふるさと札幌を心にもち、国際的な視野で学び続ける人」のことである。大通高校では「メシが食える大人」と言うものもいる。様々な事情を抱えて同校に入学してきた生徒たちに、自ら立ち上がり、社会を生きぬく力をつけてほしいということである。

この教育目標の実現のために各教師が実践を積み重ねている。私の実践もその一つである。私は「自立（自律）した札幌人」を育成するにあたって、生徒たちの「自分を変えたい」「何かに挑戦したい」という気持ちに答える学習活動の場を整え、支え、導いていくことを大事にしている。もう少しかいつまんでいうと以下の二つとなる。第一に、生徒の自己効力感を高めるために、他者と協働して学習活動に取り組む機会をつくることである。第二に、生徒自ら自立に向けて行動できるよう、多様な大人の価値観に触れながら、本物の体験ができる機会をつくることである。

これから取り上げる三つの実践の概略について、ここで示しておこう。

ミツバチプロジェクトとは、さまざまな教科が関わり合いながら、1 次産業から 3 次産業まで

の営みを学校内につくりだし、体験的に学ぶことができるプロジェクト学習である。私はこのプロジェクトの中で、主に第3次産業（商業）を学ぶことができる授業プログラムの開発を行った。また、教室での学びだけではなく、採れたハチミツを活用して多くの企業と連携・協働しながら、商品開発や販売実習等、生徒たちが働く大人と触れ合いながら、本物の体験ができる場を開拓してきた。さらに、校内の調整役として、各種教科担当教師に「授業にハチミツやミツバチを教材として取り入れてはどうか」という提案をしたり、プロジェクトの予算管理を事務部と協力して行ってきた。

キャリア探究とは、生徒たちの「挑戦したい」という気持ちを引き出すことを大事にした実践である。職員室前には、各種探究的なプロジェクト学習やボランティア求人を掲示したキャリア探究掲示板を設置している。「何かやってみたい」という生徒の気持ちを刺激し、その要望に答えられるようにする仕掛けである。各種プログラムは、学校外の地域資源を活用しながら、学習を積み重ねることができるようにしている。何かちょっとやってみたいという気持ちで参加する生徒から、今までの自分を変えたいという生徒まで参加している。このように動機はさまざまである。キャリア探究における私の役割は主に学校内外の調整役である。他の高校や大学、企業や行政と連絡調整しながら、プログラムの準備や開発をすすめた。

チャレンジグルメとは、全道の高校生が校内だけではなく、学校の外にも学びを求め、地元食材を活かしたオリジナル料理を地域との協力関係を作りながら開発し、その成果を発表するコンテストである。全道各地の高校同士が「地域」というテーマで互いに学び合うことができるこの実践で、私は、産学官連携のもとコンテストの企画・運営を統括する役割を担っている。

これらの三つの実践の展開過程をたどりなおしながら、実践の持つ意味について理解を深めていきたい。

第1節　ミツバチプロジェクト

(1)　プロジェクトの発足と準備

ミツバチの飼育を何らかのかたちで本校の教育活動に取り入れられないだろうか。かねてより管理職を中心に温められてきたこのアイディアは、養蜂の研究に取り組んできた教師が大通高校に赴任したのをきっかけに進展した。2012年（平成24年）10月、職員会議でミツバチプロジェクト発足が提案され、承認された。

年が明けた2013（平成25年）年3月、大通高校では校長名でプロジェクトの目的を記した文書を生徒保護者宛に配布した。趣旨は「ミツバチを飼育し、得たハチミツ等を利用する活動を生徒に体験させることにより、自然や動植物に興味を深め、環境から恩恵を受けて生活することの喜びを実感させ、地域の環境を意識して生活することの大切さを普段から再認識させる。」とした[1]。また、近隣のまちづくりセンターや町内会等へも会報とともに配布していただけるよう、ミツバチの飼育連絡のチラシも制作した。校内にたいしては、私が所属する渉外調整会議が中心と

[1] 札幌で都市養蜂に取り組む各所は、その多くが「百花蜜」として採蜜を行い、それを販売している。それに対して、大通高校が取り組んでいるのは、「単花蜜」の採蜜である。すなわち、周辺環境の観察と内検によるハチミツの味判定を実施し、顕微鏡を使った花粉判定等も導入することで、トチ・ニセアカシア・シナ等を分別しながら採蜜に取り組んでいるのである。採蜜されたハチミツは、熱処理をせず、糖度もそのままの生ハチミツとして販売している。

なって、PTA や教師全体へさらに分かりやすく本プロジェクトの概要を伝えるための資料を作成した。資料には、年間の流れや経費についての説明も掲載し、学校の教育活動でありながら持続可能なプロジェクトを目指していることを示した。このようなプロジェクト始動についての周知と理解・協力の呼びかけを進めながら、養蜂の開始に向けた準備が、養蜂を担当する教師を中心に進められた。

2012 年（平成 24 年）2 月に飼育届、転飼申請などの書類を北海道庁行政関連へ提出し、受理された。4 月から養蜂指導者として元小学校教諭の谷正敏氏を招き、校舎 5 階にて大通高校一群、養蜂指導者一群で養蜂を開始した。通常の養蜂家ならば、2 週間に 1 回程度の内検（養蜂箱の中を見てミツバチの健康状態やハチミツの入り具合、ミツバチの数や女王蜂の様子を見る）を実施している。それに対して、まず教師が内見を覚えるために教員研修を兼ねた内見活動を平均で週 2 回の計画で始めた。 同じく、札幌市生涯学習センター（ちえりあ）のミツバチ講座受講生の希望者に内検・採蜜を体験してもらい、年度ごとの登録制ミツバチボランティアとして養蜂活動に協力していただくという流れが生まれた。以上のように、少しずつ蜂群が拡大してきたのに合わせて、連携協力先の活動との交流をはじめていった。

徐々に教師が養蜂に慣れてきた頃からは、養蜂指導者へ依頼をせずに養蜂を行なった。多くのハチミツが採れるようになったが、その分作業量も多くなることから、ボランティアの協力が不可欠となった。

北海道での養蜂は越冬が継続的な課題の一つであった。蜂箱に断熱材を巻いたり、校舎敷地内で養蜂場所の引っ越しをしたりするといった工夫をした。ミツバチは、冬眠しない昆虫である。普段 1～3 ヶ月の働き蜂の寿命を冬期間に 6 ヶ月まで延ばすためにも活動を抑える必要がある。また、寒くなると女王蜂は卵を産まなくなる。春になって暖かくなり、紫外線を多く浴びることによって、今後の活動のために卵を産み始めると言われている。札幌で都市養蜂を行っている各業者は冬前に転飼し、本州の暖かい地域でミツバチを過ごさせる。それに対して、大通高校の年間を通じた本プロジェクトの積み重ねは、この地域社会における持続可能な養蜂という挑戦でもあった。

(2)　ミツバチプロジェクトと教科学習

校外の方からよく「ミツバチプロジェクトは部活で実施しているのですか、それとも授業ですか」と、質問されることがある。ミツバチプロジェクトは、教科横断型の学習として、授業、委員会、部活動、そして個人と、大通高校の教育活動全体を通じて、柔軟に教師も生徒も関わることができるものとして位置づけられてきた。

同校は単位制である。養蜂にかかわりたい生徒は、動物の生態という授業を履修したり、販売や商品開発を経験したい生徒は、総合実践という授業を履修している。また、広報活動に力を入れたい生徒はメディア局で活動している。以下、各教科とのかかわりについて簡単に述べておこう。

理科の学校設定科目「動物の生態」では、生徒たちが実際の内検に取り組んだ。担当教師が内検前にミツバチの生態等を詳しく説明し、どうすればミツバチをパニックにさせることなく内検できるかを生徒たちが考える機会を設けた。校舎 5 階の養蜂場は四面ガラス張りで、間近で容易

にミツバチの巣箱の出入りが観察できるようにしている。

家庭科の「フードデザイン」の授業では、採れたハチミツを活用して、商業科と連携して、オリジナル商品やレシピ開発に取り組んでいる。調理実習のように自分たちが最終的に食べることになるものではなく、商品として代金が発生してくることへの責任、衛生面にも配慮し、生徒たちは緊張感をもって活動している。

工芸の授業では、巣枠を作成したり、巣を溶かして蜜蝋を取り出し、それを活用してキャンドル制作と、蜜蝋ワックスづくりに取り組んだ。手間のかかる工程を体験することで、物を大切にする心が育まれることを目指している。

芸術（書道）の授業では、日頃から、創作作品制作をその学習活動の中心に位置づけており、商品のラベルデザインもその一環として取り組んだ。まず、生徒たちがハチミツを試食し、味・香り・食感・色などから商品の特徴やセールスポイントを検討し、それをもとに商品名・パッケージデザイン（文字）のイメージづくりに取り組んだ[2]。その際、販売側・お客様側それぞれの視点から客観的に考えていくことを大切にした。書的な表現だけではなく、デザイン性を盛り込んだ作品づくりを意識している。

課外活動もこのプロジェクトと密接な関係にある。同校の広報活動に取り組むメディア局員が毎回の内検に参加している。場内に入ったメディア局員が箱内から巣枠を取り出し、ガラス越しに巣枠を見せ、その様子を別の局員がカメラにおさめる。場内では手袋を着用しているために、カメラの扱いが難しい。内検の取材活動もまた、力を合わせての協働作業となる。以上のように、内検一つとってもさまざまな教育活動、生徒たち、教師や指導者たちが関わっており、互いに協力しながら進めているのである。

(3)　ミツバチプロジェクトと商業科の「総合実践」

ここで、私が担当した商業科「総合実践」とミツバチプロジェクトとの関係について詳しく述べておこう。この授業では、ハチミツを利用した加工商品・レシピ開発に取り組み、それを地域や道外のイベントで販売する実習に取り組んでいる。

①　「総合実践」とは？

総合実践という授業科目は、商業高校などで卒業学年の生徒たちが受講することが多い。商業の各分野（マーケティング分野、ビジネス経済分野、会計分野、ビジネス情報分野）で学んだ基礎的・基本的な知識や技術を、実践的、体験的な学習を通じて総合的に習得させる科目である。しかしながら、同校は単位制であり、生徒の興味関心によって個々に選択した授業を受講していくことになる。したがって、総合実践を履修する生徒たちの中には、入学したばかりの生徒も含まれている。このような事情があるため、総合実践を実施するには、学習指導要領を踏まえた上で、大通高校独自の学習の進め方を検討しなければならないのである。

[2] 81 名の生徒による 82 点のパッケージデザインが完成した。それらを学校行事で展示し、参観者による投票を行った。一番票数を集めた作品は、わかりやすいネーミングに加え、文字に隠された三つのミツバチに関わるデザインが採用の決め手となった。①「蜜」の文字の中に「蜂の巣を表す六角形」、②「べ」の文字の中に「蜂の 8 の字ダンス」、③「隊」の旁の部分には「ミツバチの体」が表現されている。

総合実践では、日頃から実際の社会で役立つ実践的な内容の学習を通じて、ビジネスに関する総合的な知識と技術の習得、資質能力の向上を目指している。具体的には、ビジネスマナーや接客、マーケティング等について学んでいく。こうした知識・技能の獲得と現実の商業活動の場面とを結びつけた実践的な学習（例えば、商品開発に関わる企業との交渉や販売活動をする上での現実的なマーケティング活動というように）を心がけている。

毎年、生徒たちは初めてのことばかりで戸惑う。しかし、自分の考えたレシピが企業に採用されたり、プロのデザイナーと商品ラベルの打ち合わせをしたりなど、実際に販売される商品に自分の意見が反映されたりする中で、自信や達成感を味わう体験を積み重ねていく。本プロジェクトを始めてからは、活動の趣旨についての理解が校内外に拡がり、地域の方々と連携・協働した学びの場が拡がり続けている。

② 販売実習

販売実習に向けては、事前に、大通高校で採れたハチミツの価値、そのアピールポイントを学び、共有しておかなければならない。事前準備は、各担当者で分担して行っている。同校は三部制・単位制の定時制高校であるため、放課後はなく、担当ごとの進捗状況については授業時間や生徒間のメールのやりとりを通じて共有している。

生徒たちの中にはメンバーで連絡を取り合い、授業の空き時間を使って商品レイアウトについて相談したり、ポスターを作成したりするといった自主的な活動も生まれた。

生徒も教師も、分担することにより、それぞれの責任を明確にしながら情報共有している。

印象に残っている出来事がある。私が会議で授業に遅れてしまった際、生徒たち自身によって授業が開始されていたことがあった。お昼の職員会議が長引き、授業開始 10 分は経過していただろう。会議室を飛び出し 5 階の教室まで一気に駆け上がった。販売実習が目前に迫っていたため、授業ではやらなければならないことがたくさんあり、1 分も無駄にしたくなかったのだ。勢いよく教室のドアを開けると、生徒たちは教室の前にあるホワイトボードを囲みながら、真剣な表情で互いに意見を出し合っていた。私が息を切らせながら「ごめんね。会議が長引いてしまって」というと、「先生遅いので、前回の続きを始めてました」と、自分たちで販売実習の準備内容を確認していたのだ。主体性の高まりを感じた場面である。

チャレンジオータム（毎年秋に札幌で開催される北海道の「食」の収穫祭で、全道の高校生が開発した商品を販売する取り組み）期間中は、総合実践の受講生徒は一人につき 2 日間の参加を促している。1 日目にできたことをさらに発展させたり、さまざまな役割に挑戦したりすることを期待した働きかけである。生徒たちは、事前に学習した接客や、準備しておいた商品知識を使って、商品をお客様に勧めている。自主的に全日程にわたって販売に参加する生徒も毎年みられる。

販売実習を行う中で、事前事後の打合せ等を含め、生徒たちは社会のさまざまな大人と接していく。そこでの交流を経験しながら、憧れの大人像を描いたり、今後自ら挑戦したい活動と出会うきっかけが得られている。

このような大人と~~の~~一緒に何かをする経験が高校時代の早い段階で得られると、高校生活全体を通じて、自ら学び、挑戦していく動機が育まれ、前向きな進路選択につながっていくと考えて

いた。生徒から「先生、なぜこれを勉強しなくちゃいけないの」という質問を受けることがある。一括りに答えを示すことは難しく、ましてやこちらから与えるのではなく、生徒自身が気づけるきっかけづくりをしていくことが大切である。

日々の学びを一人ひとりの生徒にとって、どのように意味あるものにしていくか。本プロジェクトの展開が示しているのは、生徒たちが地域社会、そこで生き、働く人たちとの出会いやかかわりから、それぞれの学びの「意味」や「価値」をつくりだしていく過程である。

次項では、私とミツバチプロジェクトとのかかわりについて少し詳しく述べてみたい。私にとってのミツバチプロジェクトの持つ意味について考えてみたい。

(4)　ミツバチプロジェクトと私

①「本物の体験」をさせたい

私は商業教師である。教科教育では簿記会計や情報処理、マーケティング等、ビジネスに関わる科目を生徒たちに教えている。企業などで働いた経験はない。だからであろう、書籍や他者の話を聴いた上で行っていた教材研究に物足りなさを感じていた。

初任校である釧路西高時代は、その物足りなさを外部の企業と連携することで払拭しようと試みた。しかし、外部企業と連携することは当時まだ敷居が高く、うまく実行に移すことができなかった。

この悔しさは自分の中で消えなかった。民間企業に転職することも考えた。そんな時である。札幌の先輩教師から、「社会に近い、開かれた学校」というスローガンを掲げた大通高校が新設されることを教えてもらった。札幌市教育委員会の試験に挑戦した。職を得ることとなった。2009年（平成21年）のことである。

北海道釧路西高等学校の閉校を見届け、大通高校に着任して担当した総合実践では、学校内外の人を巻き込み、巻き込まれながら、全道の高校で開発した加工品を集めてアンテナショップを開いたり、近隣の観光マップを製作したりなど、多くの挑戦をした。その一つがミツバチプロジェクトであった。私は、総合実践の授業で実施していた商品開発に、ハチミツを教材として取り入れ、札幌市内の様々な企業やシェフと商品を共同開発する学習内容を考えた。仕入原価や商品のブランディング、店舗レイアウト、接客技法についても、実際の市場相手に活動されている専門家から指導いただきながら授業内容を組み立てた。

他の学校が行っていたような「商品を仕入原価でとにかく元気よく販売する」というような実習にはしたくなかった。釧路時代から商業の授業で疑問に感じ続けてきたことだった。高校に入学して、商業活動における基礎基本を学び、商品開発や原価計算、マーケティング等、商業活動の実践に役立つ科目を学習した集大成として、自分たちが開発した商品を販売することがある。そのときに、つまり販売時には、ほぼ原価に近い金額で販売している。教育現場で利益を出してはいけないという理由からである。これでは生徒たちの実習後の感想は、「楽しかった」「様々な人と触れ合うことができて良かった」というように、商業を学ばなくてもできる経験にとどまってしまう。商業を学ぶことで世界を広げることができるはずなのに、そこに生徒たちの目を向けることができにくいのである。

私は「擬似体験」ではない「本物の体験」を通じて、社会の仕組みや問題・課題に直面するこ

とにより、生徒たちが高校卒業後も社会で活躍する構えをつくってほしかった。生徒たちに、自分の置かれている現状に限界を感じたり、将来に希望を持てなくなっているなかで、焦燥感に駆られて進路を決めてほしくなかった。

② 生徒に学びなおす

校内完結型の教育から、地域を学びの場とする教育への転換を図りたかった。しかし、答えのない挑戦は不安がつきものである。どんなに長い時間をかけて学習プログラムを用意しても、生徒たちが参加し、成長を促すことにつながらなければ意味がない。先にも示した通り、私が目指した教育実践は、生徒がいて、生徒が挑戦して、生徒が成長して初めて成り立つのである。

では、生徒はどうすれば参加するか。教師が楽しんだり学んだりできないものは、生徒に伝わるはずがない。そう考えた。それに欠かせない要素は、教師自身の動機である。多くの教師がミツバチプロジェクトに参加してもらえるようにすることを意識した。

生徒たちの学びを支える教師が、ミツバチやハチミツに興味関心を示し、「面白い！　授業に教材として取り入れてみよう」というワクワクした気持ちを高め、それが伝播し、さまざまな活動が広がることが望ましいと考えた。生徒も教師も地域の人々も一緒に学びを拡げ、深めていくのである。結果も大切だがその過程が重視される実践をつくりたかったのである。

別の課題もあった。予算である。どんな高い志があったとしても、それに見合う財政基盤がないとプロジェクトは成立しない。同校の生徒の家庭環境をみれば、自己負担でプロジェクトを行うことはじつに難しい。しかし、生徒たちが自ら予算を生み出すことは可能であると考えた。

自分たちが開発した商品を、自分たちの手で販売する。そうして、次年度のプロジェクト予算をつくりだす。こうすれば、持続発展可能なプロジェクトとなる。この循環をつくりだすプロセスは、まさに本物の商業の学びとなる。販売する商品も原価ではなく、原価と利益を合算した売価をつけて販売すればよいのである。商業を学ぶこととプロジェクトの予算をつくりだすことを統一的に実現するのである。

実際には、資金運用のしくみは、管理職や教育委員会、学校事務の協力により実現した。また、「本物の体験」を取り入れるには、学校内の共通理解の他に、学校外の企業や個人の協力が必要となる。欲をいえば、熱烈な支援者が必要だと思っている。そこまでの支援者は得られないけれども、生徒たちがワクワクしながら本気で挑戦している姿には、大人も胸を打たれる。このようなかたちで熱烈な支援者が増えだし、活動に広がりと深まりが生まれ、想定外の挑戦ができるようになっていったのである。

③ ハニー・オブ・ザ・イヤーに選ばれる

2014 年（平成 26 年）度には、同校のミツバチプロジェクトを研究者の視点でサポートしてくださっていた福井大学特命助教の杉山晋平先生にお声かけいただき、オーストラリア シドニーで「ミツバチプロジェクトを支える協働とその持続的発展を支えるコーディネーターの役割について」と題する発表の機会を得た。発表を聞いた海外の研究者が反応を示したのは、どのような流れで各教科がミツバチやハチミツを教材として授業に取り入れようとしたのか。また、本プロジェクトに関わる市民ボランティアが、なぜほぼ無償で学校教育に協力しているかという点であ

った。「ボランティアはありえない」という研究者までいた。楽しみながら多くの人が関わってくれているという程度の認識しかしていなかった私は、帰国後にこれまでのプロジェクトの成り立ちを実践報告書にまとめることで、今後の継続と発展の方法を見つけ出そうと考えた。

2018 年（平成 30 年）度には、一般社団法人日本はちみつマイスター協会が主催する「第 4 回ハニー・オブ・ザ・イヤー」において、「最優秀賞」と「来場者特別賞」を受賞した。そのため、同校のミツバチプロジェクトは、道外の大手企業にも認知され、いくつかの企業から全国発売を念頭においた商品開発をしないかという提案をもらい、活動の幅は全国にまで広がった。

今振り返ると、2015 年（平成 27 年）度くらいから、ミツバチプロジェクトから派生し、札幌の歴史を探究したり、食や農業、漁業、まちづくりやテレビ番組制作などについて学ぶことができる、生徒有志参加型のプロジェクト学習がいくつも生まれた。

すべて全く新しいわけではなく、人とのつながりが、新たなつながりを生み、校内に新しい風を吹かせることによって、生徒たちが主体的に、校外で学べる場の枠組みが拡がっていった。

④ ミツバチプロジェクトが切り開いている地平

全国各地や世界のハチミツに出会えるイベント「はちみつフェスタ」には 2016 年（平成 28 年）から参加している。札幌市内での販売実習でお客様から受ける質問は、商品や学校についての話題が多くを占める中、東京銀座での販売では、北海道や札幌についての質問が多い。そのため、札幌市民以外にも伝わるように、地名など、札幌市民だけに通用するような言葉を使わない。蜜の取れる花についても気候などの関係によって北海道独自のものがないか事前に確認した。生徒たちはより自分たちの暮らす地域について見つめ直す良い機会となっている。

世界中のハチミツが集められた会場を、興味津々に歩き回る生徒の姿は大変印象的である。「こんなパッケージのハチミツがありました」「あそこのブースのレイアウトは参考になった」など、生徒自ら興味を持って参加している。

生徒たちは、販売実習期間中ほとんど教師からの助けを借りず販売している。初参加の時、ある生徒が客から、環境、植物、調理、養蜂の基礎知識、商品に関する原価計算等、ありとあらゆる質問にしっかりと対応している姿を目の当たりにした。

40 代ぐらいのハチミツに詳しいと思われる女性の接客をしていた時である。「高校生が養蜂しているの？」と少し驚いた様子で質問してきたお客様に対して、その生徒は、ミツバチプロジェクトが始まった経緯、自分がその中でどの様なかかわりをしていて、何を学んでいるかを丁寧に答えていた。それから試食のハチミツを手渡し、花の写真を見せながら、花の開花時期や香り、味の特徴などを伝え、秋に養蜂場にスズメバチが飛来した際の対処法や自分が興味関心をもったコロニー（群）の話題などで盛り上がっていた。

すっかり生徒を気に入ったお客様は、「札幌には行ったことがないんだけど、お勧めの観光スポットはある？」という質問に対して、一般的なおすすめと自分のおすすめを説明していた。そして最後にこう付け加えたのだ「うちの学校にも遊びに来てくださいね！」と。

その客はハチミツを二つ購入し、学校のパンフレットをもって立ち去った。

私は「なぜそんなになんでも答えられるようになったの」と生徒に尋ねた。生徒は、「ミツバチ関連の講座を 3 年かけて全て履修したからです」と答えた。学校のシラバスには、ミツバチ関

連講座という表記はどこにもない。生徒自らが情報を収集し、ハチミツとミツバチを教材として学ぶ独自の「カリキュラム」を創りだしていたのだ。この時、当たり前のように答える生徒の姿から、教科横断型の学びの可能性を感じたのだった。

当時のことを振り返ってみると、私は大事なことから目をそらしていたことに気がついた。教科横断という言葉にまどわされて、関わっている教科の知識・技術をどのくらい身に着けているか。それらを統合してどんな接客ができたのかということばかりに意識が向いていた。

今改めて、生徒が学んだことは何かと自分に問い返してみると、知識や技術だけではなく、この生徒がなぜ自らミツバチ関連の授業を受講していったのか、なぜ自ら東京の販売実習に行きたいと言ってきたのか。なぜお客様と触れ合うことが楽しい、やりがいがあると言っていたのか、なぜ不登校経験がある生徒が前向きに進路活動に努力できたのか。その意味を感じ考えることができる。

私は、当時も自ら学ぼうとした生徒の成長に驚き喜びを感じていた。頭や体でそれらを感じていても、文字に起こそうとした時に、その一番大事な部分が抜け落ちていた。これは過去の実践報告書を読み返してみれば一目瞭然である。すなわちそれは、大切だと思いながらも、実践の持つ意味をしっかりと感じ考えてこなかったということである。実践を始める前は、実践を行う目的としてそれなりの言葉を並べているが、実践を進めていくうちに、手段が目的化され、用意した手段をやり遂げた生徒の姿ばかりに自分の意識が向いてしまっていたのだ。

生徒たちは実践からもっと尊い学びを得ていたのにも関わらず、実践の場を調えてきた私自身が、それに気が付けていなかったのである。今後は、自らの実践の持つ意味をしっかりと捉え直さなければ、生徒の学びの場を整え、支えることが出来ても、生徒をその先の可能性へ導くことはできないと感じた。生徒の能力を最大限に引き出し、次の可能性につなげて行くことが我々の使命であり役割である。その役割をしっかりと果たさなくてはならない。

第 2 節　キャリア探究

① 「社会に開かれた教育課程」を実現するために

「社会に近い、開かれた学校」というスローガンを掲げる大通高校では、いま「社会に開かれた教育課程」という観点からカリキュラムを整備している。このカリキュラム方針にしたがって教育実践を整備、展開することによって、教育目標である「自立した札幌人」を育成するのである。「社会に開かれた教育課程」とは、学校・家庭・地域が協力し、学校内に留まらず、地域資源を生かした教育を展開する中で、社会に貢献できる人材を育成しようということである。

私は「社会に開かれた教育課程」を実現するにあたって、以下の 3 点を大事にした。

第一にこれまで学校内で行われていた教科毎の学習にとらわれず、現実社会の中から必要な学びを感じ考えることができる学習の機会を生み出すことである。

第二に、決められた学習内容、学習プログラムを毎回ただ繰り返し実施するのではなく、学習者である生徒たちの学んでいく過程や学習の成果、生徒一人ひとりの成長の様子を観察し、改善が必要なところがあれば改善し、新たな挑戦を繰り返していくことである。

第三に、学習活動に必要な人員や予算を適宜確保し、持続発展可能な企画・運営体制の仕組みを確立することである。

ミツバチプロジェクトでは、地域と連携した教育活動を積み重ねてきた。しかしながら、「社会に開かれた教育課程」の実現には大きな壁が立ちはだかっていた。学校と地域の連携を通じた教育活動の積み重ねが、学校と地域の協働によるカリキュラム・マネジメントに転換されないという課題である。

地元企業との商品開発や販売実習のような教育活動が試みられようとも、従来の授業や課外活動の枠内で展開されてきたカリキュラム・マネジメントの方法論が変わらない限り、生徒たちの行う学習活動の成果が、学校の枠を超えられず、教師も生徒たちもそこでの成功・失敗体験を狭い視野でしか捉えることができない。

また、学習プログラムをつくる役割も相変わらず学校の教師だけで行うことによって、良い発想が浮かんでも実現することが困難であったり、実現できたとしても、拡げたり深めたりして、よりよい教育活動を生み出すことができない。それは、人員や予算確保にまで影響し、結局、全て学校の枠を超えることができないのである。

これでは、校内外で学ぶ生徒たちの豊かな成長を多面的・総合的に評価できないばかりか、教師集団と地域の関係者双方に生じている意識変化も「社会に開かれた教育課程」に反映されないのではないだろうか。

これまで行ってきた職場見学やインターンシップなどは、学校から地域企業などに受け入れの依頼をし、承諾を得て活動してきた。しかし 2015 年（平成 27 年）度あたりから、「札幌市の中心にある定時制高校ではなかなか面白い取り組みをしている」という理解が一部の地域の方々に拡がり、地域の人から、地域活性につながる取り組みに参加しませんかと声がかかるようになった。なかにはアルバイトが集まらないために、労働力として、人件費の削減を目当てに話を持ちかけてくる事業所もあった。そのため、学校外の人や企業、団体とつながる基準の一つとして大切にしたことは、いかに学校に足を運び生徒と真剣に関わってくださるかである。生徒たちと接する中で、教育に興味関心を持ち、教職員と近い目線で、真剣に生徒と向き合ってくれるか、を判断基準にしたのである。かくして「キャリア探究」が生まれたのである。

② 「キャリア探究」をつくる

現在「キャリア探究」は、35 単位時間の 1 単位の授業である。45 分×35 時間の課外活動を行い、レポート提出した場合、単位を認定している。キャリア探究は、これまでのさまざまな課題解決型学習（Project Based Leaning）に、有志で参加した生徒の努力の成果によって成立した学習活動である。

我々の声かけに集まった生徒たちは、様々なプログラムに参加し、大人に手助けしてもらいながらも、自分たちの力で数々の成功と失敗の体験を積み重ねて、最後まで活動した。そこから学び、感じ考えたことを自分だけのものとせず、年度末のプレゼンテーション大会で発表した。キャリア探究、すなわち、課外学習に単位を認定する仕組みは、そうした生徒たちの成長の物語を目にした教師が、一人また一人と増え、「こんなに生徒たちが外で頑張っているのなら、単位を認めよう」という経緯で実現したのである。

キャリア探究で実施しているプログラムの特徴は、地域を学びの場としていることである。キャリア探究には、自分の進路について考えたり、地域社会の担い手として、課題をもって継続的

に校外で活動してほしいという私の願いが込められている[3]。

ミツバチプロジェクトでは、通常の時間割にある授業を中心に組み立てているため、該当授業を受講していない生徒にとっては、養蜂ボランティアやメディア局に所属していない限り関わることが難しい。また、2 年次生になれば、「総合的な探究の時間」でインターンシップを実施するのだが、決められた時期に、決められた場所にいかねければならない。生徒たちはその時期に心の準備ができず、参加できない、したくない、当日体調不良を理由に欠席するということが多かった。

新たな選択肢として、キャリア探究は、一年を通じて、自ら「何か」に挑戦したいと思い立った時に挑戦できる場、さらには、その内容を自ら選択できる場にしようと考えたのである。

ミツバチプロジェクトのおかげで、地域とのつながりは拡がっていた。こうして学校外と連携した活動が盛んになればなるほど、一部の人からは、養蜂や販売担当者がいなくなったり、万が一ハチミツが採れなかったら、プロジェクト継続や地域連携の学習は厳しいのではないかという心配の声があがる。

私はキャリア探究に取り入れる学習プログラムについては、ミツバチプロジェクトとは切り離そうと決めた。生徒たちが興味関心を示しそうな題材を盛り込んだ学習プログラムを、新しく地域の方々と共につくりあげていこうと考えた。そこで、キャリア探究では、所属年次や授業の枠を超えるだけでなく、大通高校（一部の市立の高校）に在籍していれば、誰でも挑戦できるようにした。

同校の生徒たちは、学校内だけでは人に認められたり、必要とされたりする機会が少ないように感じる。義務教育段階で不登校を経験したことがある生徒が多い学校である。自己有用感が極端に低かった。しかし、自分は一人の人間であり、存在自体を認めて欲しいという自尊心はどの生徒にも備わっている[4]。この自尊心をうまく学習活動に結び付けることができないか。キャリア探究の各種プログラムを通じて、多くの多様な大人の価値観と触れ合い、地域で活動することにより、現在の「自分」でも社会に必要とされる、かけがえのない存在であると実感できる経験をさせたいと考えたのである。

地域の方との出会い直しも強く意識した。一方的に知るだけではなく、現在の高校生を知ってもらう機会を設けることが大切であると考えた。

高校在学中に、社会に出てからでないとできなかった「成功」や「失敗」を体験する。そうすることにより、自らの進路選択や生き方を見つめ直す契機を、すべての生徒につくりだす。多様性を保障し、他者と関係をつくりながら、協働する力を養うことができる教育の実現に挑戦をしてみたかったのである。

カリキュラム設計が抱えている問題点を解決しなければならなかった。有志生徒を集めて、活動していた様々な実践をキャリア探究プログラムとして、単位を認定する仕組みはつくった。しかし、これらの活動の多くは、時間割外の課外学習が中心である。そのため、地域の大人と協力して学習プログラムを運営しなければならなかった。また、地元の大学生を巻き込むことも大事

[3] 「キャリア探究」の実践をつくるにあたっても、ミツバチプロジェクトの時と同様、「多様な大人の価値観に触れる」ことや「本物の体験」を土台に据えた。

[4] このことを改めて教えてくれたのは、鮫島先生から勧められた『わたしはダニエル・ブレイク』という映画作品である。

なことであった。彼らが、運営スタッフに加わると、一つひとつのプログラムの質が格段に上がるのであった。世代が近い学生が加わることによって、生徒たちが挑戦できる幅や到達目標を質的に高めることができるのであった。

③ アニマドーレ（ANIMADORE）の実践

キャリア探究にはたくさんのプログラムがある。共通しているのは全て学校外の学習であり、地域資源を教材としていることである。ここでは「キャリア探究」のプログラムを象徴する食農体験プログラム「アニマドーレ」[5]について述べておく。このプログラムでは、アニマドーレの育成と食農教育プログラムの確立、そして北海道の一次産業の活性化を目的としている。農業は北海道経済の大部分を支えている。北海道で暮らす我々にとっては大切な産業であり、農業の担い手を育成することもこれからの課題である。農家にならないから関係ないではなく、見方を変えれば、農業には、流通、加工、販売、料理等、ありとあらゆる職種の人々が関わっており、農業を通じて多くの「仕事」「働く」に触れることができる。

(1) 「アニマドーレ」プログラムへの端緒

2015 年（平成 27 年）度に、同じ市立高校である開成中等教育学校の生徒たちがファームインなど、農家で田植え体験を実施していた。私は、チャレンジグルメの事務局を担っていたことから、食育冊子の発行や食育イベントなどを主催する企業の女性 H さんに、一緒に食育や農業の大切さを伝える学習プログラムの企画・運営をやらないかと誘われた。私自身、農業に詳しいわけでもなかったものの、「田植え体験だけではもったいない、もともとあった『生産者と食卓をつなぐ』というテーマを大切にして、そこに関わる職業に触れられるプログラムを一緒につくりましょう」と提案した。

2016 年（平成 28 年）度に、キャリア探究プログラムのひとつとして、アニマドーレの学習プログラムに、同校生徒も参加できるようにした。農業体験を通じて土に触れ、人に触れ、新しい知識や技術に触れる。その後、生徒たちは自ら販売体験、商品開発、広報、調理体験、農業体験（2 泊のファームイン）のいくつかのユニットに分かれて活動する。生徒たちの「やってみたい」という意欲を喚起し、自らの主体性を発揮しながら学ぶことができる学習活動の「場」が誕生したのである。

(2) プログラムの展開

2016 年（平成 28 年）度、アニマドーレの学習プログラムは、4 つのコースで構成されていた。各コースの概要とねらいは次のとおりである。

---

[5] 食育の先進国イタリアにはアニマトーレ（ANIMATORE）と呼ばれる人たちがいる。「楽しませる人」「元気にする人」という意味の言葉で、保育や食育の現場で参加者（子どもたち）を楽しませながら教育プログラムを行う専門家である。「食の王国」北海道にも、生産者と食卓をつなぎ、食の大切さを伝えるプロフェッショナルがいたら.....。さらに、農家の息子である教師が、北海道で教師をやっていて、食に恵まれたこの大地で、農業にまったく興味関心を持たない生徒たちを見て、「北海道の農業の将来が不安だ」と言った。そうした様々な立場から発せられた言葉が一つになり、食農教育プログラムの専門家＝アニマドーレ（ANIMADORE）という言葉が生まれた。ANIMADORE の“DO”は北海道（HOKKAIDO）の DO、そして動詞の DO（する）である。

① ファームインコース

- 農業体験を通して、生産者の苦労と喜びを知る。
- 農業の大切さとかっこよさを知る。
- 出荷までの全行程を体験することで農業を理解する。

② 販売体験コース

- 消費者を体験し、即戦力を養う。
- 消費者心理を考え、自分の言葉でどう伝えるかを学ぶ。
- 農業をビジネスとして捉え、どう売るかを学ぶ。

③ 商品開発体験コース

- 商品開発における必要事項を理解する。
- 製造業と生産者･流通業者との結び付きを知る。
- 新しいモノを生みだすことの喜びを知る。
- 商品開発に必要な発想力や着想力を身につける。

④ 広報ＰＲ体験コース

- アニマドーレを通じて、農や食の大切さを伝える。
- 取材、撮影から、紙面の記事作成や動画づくりを通じて、「伝える」「表現する」ことの楽しさを知る。

アニマドーレの企画・運営スタッフにはさまざまな専門家たちがいる。他の地域連携プログラムでは、主に連絡調整等の仕事を担うのが教師の役割であった。

アニマドーレでは、教師である私自身が食や広報、調理やデザインの専門家たちと一緒にプログラムの開発・運営を行う。学校外の多様な人々と一緒に学習プログラムをつくることは、私にとって新しい経験だった。

実際の生徒たちの学びの様子はこうである。

生徒たちは、大人や大学生たちと共に、ある時は、抜けるような青空のもと田畑で泥だらけになりながら「野菜ってこうやって育つんだ」「腰が砕けそう！」「いつも食べてるのよりめちゃくちゃ美味しい！」と言いながら生産者と触れ合う。またある時は、まちなかのお店や企業のオフィスを学習の場として、商品の提案プレゼンや販売実習、販売促進ツールや広報物の製作などを行う。

ある企業に、生徒たちが一所懸命考案したドレッシングの商品提案プレゼンテーションを行なった際、「これでは商品化できない」と言われ不採用になったことがある。提案者として商品説明をした生徒は、「高校生だからって子ども扱いせず、本気でプレゼンを聞いてもらって嬉しかった」と、不採用になったにも関わらず、満足気だったことがある。働く大人と場の力が生み出す学びであると感じた。

アニマドーレとミツバチプロジェクトを比較してみると、このプログラムの特徴がよくわかる。両者に共通するのは、学びの場を学校外に置いているということ、教師だけではなく様々な大人が関わっているというところだ。

違いは三つある。第一に、教師が地域の大人たちと学習プログラムを一緒に考案していることである。第二に、毎年プログラム内容の改善点を話し合いながら、実験的な試みにも挑戦できることである。第三に、学校関係者や学校の公的予算だけに頼らず、活動の意義を感じた企業や団体から人員や予算を支援してもらい活動していることである。

(3) アニマドーレに参加している大人たち

ここに集まる大人は決して暇だから集まってきているわけではない。趣味程度の気持ちで参加しているわけでもない。自分たちが経験してきた働くことの楽しさと苦しさ、人生の中で起こった困難をどのように乗り越え、現在何を大切にしながら生きているか、そして何より、生きる希望を高校生たちに伝えて、一人でも多くの高校生が前向きな気持ちで社会に巣立ってきて欲しいと願っている。それが北海道を活性化することにつながり、自分たちの生活を豊にすると考えているからだ。

大人たちは高校生と関わる中で、「世の中にとって良いことをしたって思えて気持ちがいい」「高校生から学ぶことがたくさんある」「一緒に活動していると未来に希望が持てる」というような言葉を口にする。その言葉ひとつ一つに、高校生との大きな差は感じられない。ともすると、子どもと大人がそれぞれ抱える不安や恐れ、喜びややりがいが相似形をなしているように思えるのである。

アニマドーレは、ただ農業体験をする学習プログラムではない。普段お店や食卓に並ぶ食材が、どのような人々の手によってつくられてきたのか。生産者がどれほどの思いを込めて育ててきたのか。「いただきます」や「ごちそうさま」の意味を改めて学ぶことができるのである。

最初にアニマドーレプログラムの連携者として手を挙げてくれたのは農家であった。少しでも安全で美味しい野菜を育てて、多くの人に喜んでもらいたいと汗を流すおじいさんである。そうした生産者と触れ合うことで、自分たちが思っていた以上に、自分たちを思いやってくれている人がいる存在に気づくことができる。

人のために働く人がいることにも気づくことができる。自分たちも人を思いやる気持ちを大切にしなければならないと気づくことができる。大切に育てた命、育てられた命に感謝をしようと気づくことができる。こうした気づきの一つひとつが生徒たちの明日への活力になり、自分たちも社会に貢献できる大人になろうという気持ちの芽生えにつながっていくのではないだろうか。

働く大人に触れ合うことは、社会のルールや仕事を覚えたりするだけではなく、そこで働く大人たちの生き方に触れることができる貴重な体験である。

現在、アニマドーレは、札幌市立高校の生徒たちを対象にして、参加生徒を募集している。連携先は学校外にあるため、自分は市立高校のどこへ異動しようとこの実践に関わることができるし、他校の教師にも同じことが言えると考えていた。現に教育委員会に異動してからも関わり続けることができている。

第 3 節　高校生チャレンジグルメコンテスト

チャレンジグルメは、全道の高校生が校内だけではなく、学校の外にも学びを求める。地元食材を活かしたオリジナル料理を地元との協力関係を作りながら開発する。その成果発表をコンテ

スト形式で楽しむものである。一連の学習過程は、社会と郷土の両方を知る体験的な学びの行事でもある。

一方で、時間や施設などの制約の中で、現実的な知恵を絞り、原価計算、接客マナー、来場客の嗜好等の社会を学ぶ社会的体験の機会となっている。他方で、わがまちの特色・食材・食文化・産業・まちを支える大人たちの仕事等について、能動的に学ぶ機会となっている。

(1) 北海道の教師として

私の正規採用後の初任校は、札幌から 350 km離れた道東の釧路であった。釧路時代は、札幌へ研修に行くにも予算が少ないために、2 年に 1 回地方の研修に参加できれば良い方だった。生徒たちが学校外に出て、何か新規の大会やコンテストに挑戦するにも、予算の関係で断念せざるを得なかった。釧路は北海道の中でも比較的大きな街である。大きな街であるにも関わらず、そのような現実に悩まされたのである。

目を採用同期が勤務する島の学校や僻地の学校に向けてみれば、文科省から何らかの指定を受けている学校を除けば､生徒と教師が共に挑戦できる場は学校の近隣以外にないのが現実だった。

地域の教育機会格差をなくしたい。北海道は広い。東西南北、地域によっては当たり前のことだが、文化や風土が全く異なる。しかし、そこで働く教師がつながりながら教育活動をしたら、観光やマーケティング、流通などにおいても、これまでにない魅力的な商業教育が実践できるのではないか。全道で頑張っている同期の先生方と一緒に仕事がしたい[6]。そんな思いから始めたのが「チャレンジグルメ」であった。現実はそう甘くはなかった。ほとんどの学校は商業教師数名で､一人しかいない学校も少なくなかった。日々の仕事に追われ､新しい試みに挑戦したくても、時間とお金がないことがそれを阻んだ。そうした声は、全同各地にいた同期や先生方から聞こえてきた。何より私自身もそうした状況を体験していたのでよく理解していた。

(2) 「オータムフェスト」から「高校生チャレンジグルメコンテスト」へ

大通高校に着任した時、真っ先に考えていたのは、「札幌にいる自分に何かできないか」ということだった。漠然と頭の中にあったのは、どこの地域の学校も、金銭的負担がない状態で挑戦できる場をつくることだった。しかし、何から手をつけてよいのか全く見当もつかなかった。

2008 年（平成 20 年）度に開校した大通高校は、職業体験の一貫として、大通公園で開催されている食の祭典オータムフェストというイベント会場で、運営のボランティアをしていた。2009 年（平成 21 年）度には、札幌市観光協会から「テント 2 張りを無償で貸し出すので何かやってみませんか」と声がかかり、生徒たちと相談して、イベント期間中に、全国の高校生が開発した商品を販売するアンテナショップ「チャレンジオータム 」を土日祝日に運営した。

2012年（平成24年）のことである。一つのテントで同校の生徒が、ミツバチプロジェクトで作った加工品を販売し、隣のもうひとつのテントでEBE-1グランプリ（江別のご当地グルメを決めるイベント）で優勝した北海道江別高等学校（以下、江別高校）の生徒が「えべつちゃんぽん」を

[6] 初任者研修の期間中には、同期の仲間とこれからの商業教育についてたくさんの夢を語り合った。「あんなことに挑戦したい」「こんな仕組みをつくりたい...」と。そして所々で「一緒にやろう」という言葉が行き交ったのだ。

販売していた。

江別高校のえべつちゃんぽんのブースでは、加工品とは違い、その場でお客様に食べてもらっていた。反応がすぐに返ってきていた。それを横で見ていた同校生徒たちが「自分たちもやってみたい！」と言い出したのだ。この生徒は、ただ商品をたくさん売り上げればいいという考えではなく、自分たちの商品を食べたお客様が、どのような反応をしてくれるのか、喜んでもらえるのか、そういった反応を知りたいと思ったのだろう。一見同じ販売実習でも、加工品販売とその場でお客様の反応がわかる料理販売では、得られる学びもお客様との触れ合いもより深いものになると生徒は感じていたのだ。

加工品以外の食品を扱うイベントは保健所などの兼ね合いもあってリスクが高かった。だから二の足を踏んでいた。私は同じ商業の教師である江別高校の先生と一緒に多くの方々の協力やアドバイスをいただきながら、料理で競うコンテストを企画しはじめた。

食味だけではなく、ストアオペレーションや原価計算などの学びの要素をコンテストの中に組み込み、さらに、地元地域と高校生がつながりを持ち、若者の力でまちを活性化できたらと考えていた。彼も同じだった。どのようなコンテストにするのか。思い描いたのは「北海道で食の甲子園を開催すること」であった。北海道には僻地といわれるところにも魅力的なまちがたくさん存在する。そうしたまちで学ぶ高校生や教師に光を当てたかったのである。

各地域のまちが、学校を中心に協力・連携関係を結び、そうした関係をもつもの同士がコンテストを通じて交わりあった時に、これまでになかった地域同士のつながりや学び合い、「学校の価値」や「北海道の価値」の高まりを期待できるのではないかと考えた。

実践の展開の場は、学校でも、地域だけでもなく、「北海道」を意識した。北海道のあらゆる学校で、それぞれの学校のコミュニティ（授業・委員会・部活動等）が中心となり、全道各地で実践を展開したのち、その年の本戦地（コンテスト開催地）となる「まち」に高校生たちが集結するようにしたのである。

(3) 高校生チャレンジグルメコンテスト実行委員会

大きな問題は財政的な裏打ちであった。コンテストに参加する資金面の負担がなくなれば、全道各地のどこの学校も挑戦できる。コンテストがきっかけとなり、自分たちが暮らす「まち」や「地域」に目を向けることができる。コンテストに参加することにより、自らのまちの広報活動になる。コンテストで受賞することができれば、生徒や学校だけでなく、まちの人たちにとっても誇らしいこととなる。地域に対していろんな貢献ができるのではないかと考えたのである。しかし、学校の予算はどこも厳しかった。とにかく資金を集めなければいけなかった。志を同じくする私たち教師二人だけでは難しかった。コンテストを開催するためには、学校関係者以外の企業・大学と連携・協力した実行委員会、そして高校生の学びを応援する企業、全道に点在する熱意ある高校教師と共通理解をつくらなければならなかった。

まずは、実行委員会を組織することからはじめた。教師二人で北海道大学農学部の教授に実行委員会の会長を引き受けてもらうように依頼し、承諾いただいた。その後、北海道庁経済部の次長や食関連の企業を紹介してもらった。資金集めの相談にのってもらうためであった。経験したことがなかったので資金集めは 3 ヶ月ほど苦戦した。それでも、10 社、20 社と手分けをして企業

を回るうちに少しずつ協力企業が現れ始めた。しかし、当初想定していた金額では、参加校の負担なしでコンテストを開催することが難しかった。教師の仕事をしながらの資金集めに限界を感じた。そこで、以前からチャレンジオータムや他の授業実践でお世話になっていた、公益社団法人日本青年会議所（JC）の会長と一般社団法人札幌青年会議所の会長に実行委員会に加わっていただいた。

開催資金は集まった。しかし、他にも課題が山積だった。事務局を学校の中に置いてしまっていたため、学校に様々な問い合わせの電話が殺到し、事務や同僚に迷惑をかけてしまった。事務局を置いてくれる企業を探さなければならなくなった。できるだけ多くの出場校に賞を持ち帰り地元を活性化してほしかった。北海道知事賞や札幌市長賞を用意するための手続きをとった。公式サイトの開設のために地元の大学に依頼した。その他にも、保健所との調整、会場の選定など、次々と仕事をしていった。初めてのことばかりで苦しいことも多かった。後悔はしなかった。もう一人の商業科教師や学校外の方々と一緒にコンテストを創り上げていく過程にやりがいを感じていた。また、商業科の自分にとっては実体験の伴った教材研究となった。

最後に立ちはだかった課題は、参加校集めである。場は整っても参加校がなければ意味がない。初開催の時はとにかく案内文書とチラシを全道全ての高校に送り、出場できそうな学校に手当たり次第電話をした。最終的に同期のいる学校や先輩たちが勤務する学校、チャレンジオータムに参加していた学校がエントリーしてくれた。その時、やっと目標を叶えるスタート地点に立てた気がした。それから実行委員会は毎年挑戦の連続だった。

2 回目の開催前には、志を共にしていた教師が病気でこの世を去ってしまった。資金調達や会場選定が困難を極め、今年で最後かもしれないと下を向くことも何度もあった。大学・高校・行政・企業と、様々な関係者が増えることで、プラスに働くこともあれば、その逆もあり、人間関係に悩まされることも一度や二度ではなかった。

実行委員会の方々が良かれと思って紹介してくれた企業が競合関係にあったり、始めに事務局を置いていた企業の社員が高齢化のため、「あと何年お手伝いできるか不安」と言われたので、他の企業を探したところ、「ここまで協力してあげたのに」とその社員の気分を害してしまったこともあった。

幾多の困難を乗り越え、継続する力をくれたのは、全道から本コンテストに出場した生徒たちの声である。どこの学校の生徒たちも「来年は後輩たちにも是非経験してもらいたい」と表彰式の壇上で語るのである。「来年は」という言葉は、実行委員会の中で「来年も必ず」開催するという決意に変換されてきた。

2013 年（平成 25 年）に初開催したチャレンジグルメは、現在も少しずつ形態を改善しながら毎年開催している。私自身がコンテストの事務局として奔走する中、大通高校の商業科目担当の同僚教員は、大通高校として出場するために、毎年代わる代わる生徒の指導にあったってくれていた。いくら事務局といえども、自分が所属する学校が出場しないコンテストの事務局業務、それも事務局長を担うのは避けたかった。当時、大通高校の一教師でありながら、事務局としての挑戦を思いっきりさせてもらえていたのは、この実践の意義を理解してくれた歴代の管理職であり、同僚たちである。

この章では、私の三つの実践を振り返ってみた。ミツバチプロジェクトでは、1 次産業から 3 次

産業までの営みを学校内につくりだし、生徒たちが実際の「仕事」や「働く」ということを、体験を通じて学ぶことにより、学校の学びが社会に出てからも直接役立ち、学校から職業社会への移行がよりスムーズになっていくのではないかという可能性を感じた。生徒たちは教室で学んだ知識や技術を生かしながら、さまざまな場所で実践を積むことができている。かくして、授業実践と課外学習をうまく組み合わせることで、学校教育と地域社会を結ぶことにもつながっていくことを学んだ。

キャリア探究で関わる大人たちは、高校生を子ども扱いせず、本気で向き合ってくれている。生徒たちは、そうした大人と共に各種プロジェクトに参加することで、人に認められたり、頼りにされたりする経験を積む。これは、学校の中だけではなかなか経験することは難しい。そうした経験をすることで、生徒たちの自己有用感が高まり、自分でも人のため、社会のために何かできるかもしれないと考えられるようになっている。

それまではイベントやプロジェクトをつくり上げるために必要な費用を強く意識したことがなかった。どちらかと言えば、思うような教育活動ができない場合、他人のせいにしてしまっていた節がある。しかし、チャレンジグルメでは、ゼロから協力者や資金を集めるという貴重な経験を積むことができた。また、事務局として活動することにより、自分が勤務する学校やまち以外の様々な市町村とのネットワークが拡がり、貴重な情報を集めることができるようになった。これらは全て大通高校での商業教育実践に役だった。

こうして、それまでの自らの実践を振り返ってみると、全ての実践に共通点があることに改めて気がついた。これらの実践は、生徒たちが誰かから参加を強制されることなく、自ら主体的に目的を持って挑戦する学びの場であるということ。また、多くのプログラムで多様な人々と協働する機会を設けていること。そして、その中で多様性や自己理解を深めることができるということである。

次章では、これらの実践から生徒が何を学び取っているのか考えてみたい。第 3 章までは、私自身による実践の振り返りであった。この作業を通じて、私にとっての実践の持つ意味を語り直してきた。

次章では、生徒の力を借りて私の実践をもう一度語り直してみる。三つの実践で学んだ生徒の声を注意深く聴くのである。生徒たちにとって、私の実践はいかなる意味をもったのか。生徒の語りを通じて、自らの実践の持つ意味について理解を深めたい。

第 2 章 生徒の語りを聴く

前章では、私が行ってきた三つの実践について振り返ってみた。この章では、それぞれの実践の中で生徒が何を学び取っているのか考えてみたい。

三つの実践のうち、ミツバチプロジェクト、アニマドーレ については、大通高校の生徒に直接インタビューを行った。語りを聴く生徒は、それぞれの実践において特徴的な語りをしている生徒である。生徒の声を注意深く聴くことによって、自らの実践の持つ意味についてさらに理解を深めることを目的としたい。

インタビューは、個別で一人およそ 1 時間ずつ行った。聞き取りに際しては、次のように大きく 6 つの質問を用意し、都度付随した質問を追加した。生徒には自由に答えてもらうことを通じ

て、生徒たちが実践の中で「何を学び取ったのか」が浮かび上がるように工夫した。

1. 大通高校に入学するまでの自分について教えてください。
2. 実践に参加したきっかけを教えてください。
3. 実践の中で特に印象に残っているエピソードを教えてください。
4. 実践に参加して感じ考えたことを教えてください。
5. 実践から得た学びについて教えてください。
6. 進路選択に影響があった場合、どのようなことが影響したか教えてください。

生徒たちは、卒業を控えていたこともあり、私の質問に答えながら、今後の展望についても話をしてくれた。実践の持つ意味については、私が考えていた以上の学びを得ていたことを教えてくれた。

高校生チャレンジグルメコンテストの実践については、同校生徒ではなく、参加校のひとつ、羅臼高校の生徒を取り上げた。羅臼高校の生徒を取り上げた一番の理由は、出場校の中で一番地域と密着した活動を行なっていたからである。羅臼高校の生徒には直接会うことができなかったため、生徒が事務局に提出した感想文を丁寧に読み解くことで分析を試みた。注目したのは、コンテストに参加する事前事後の生徒自身が捉えた実践の持つ意味の変化と実践の中で、何を学び取ったのかである。

それでは生徒の語りを聴いていこう。なお、生徒の発言は「　」、発言中の他者の発言および筆者による強調語は『　』で表記している。

第１節　ミツバチプロジェクトの持つ意味とは？

本節では、大通高校在籍 3 年目の A さんを取り上げる。A さんには昼休みに時間を作ってもらい、ミツバチプロジェクトについて話をした。その語りを聴いていく。この生徒を取り上げた理由は 3 つある。

第一に、私が担当する総合実践という商業科目を履修していたからである。総合実践という授業名からは、いまひとつ授業内容が想像しにくい。何が「総合」なのか、何を「実践」するのか。生徒たちの授業選択の理由は様々である。

当時の代表的な志望理由を挙げると、ひとつは「ミツバチプロジェクトで商品開発や販売実習が体験できて楽しそうだから」。もう一つは、「人に勧められたので何となく履修しました」である。開校してからの数年間は、この時間帯に他に履修する授業がなかったからという理由を口にする生徒もいた。現在はそういった生徒はほとんどいない。ミツバチプロジェクトの実践によって、授業内容が周囲に理解され始めたからだ。A さんは比較的積極的な理由で履修してきた生徒である。

第二に、同校入学までに、いじめや不登校の経験があったということである。ミツバチプロジェクトでは、自分以外の他者と協働しながら学ぶ機会を多く設定している。他者や社会と関わる力を具体的な経験を積み重ねながら、自立を支え、促すためである。

大通高校の生徒の学習指導において欠かせない要素である。いじめや不登校の経験から、他者

とのコミュニケーションに苦手意識を持っていたり、人と関わりたくないと思っている生徒が多い中で、A さんもその一人であった。プロジェクト活動を通じて、他者と関わりながら彼女はどのように感じ考え、何を学び取ったのであろうか。

第三に、A さんは、進路選択に本プロジェクトが影響したと振り返っている。同校における教育的なはたらきかけの総体が凝縮した形で表現されるのが進路選択である。「社会に近い、開かれた学校」というスローガンを掲げる大通高校における教育実践を評価するにあたって、自立に向けて歩みはじめた具体的な姿として、生徒の進路選択を検討することは欠かせない。A さんの進路選択に、プロジェクトの何がどのように影響したのか。このことを考えるにあたっては、以下のような観点から検討する。確かに、その時々の授業において、生徒がどのような力を身につけたのか、という観点から教育実践を評価することは大事である。

しかし、それ以上に大事なことは、その時々の授業で身につけたことが、その後の生徒による進路選択の中でどのような形で発揮されているのか、という観点から教育実践を評価することであると考える。ここでは後者の立場から A さんの語りを聴いていく。A さんが進路選択するにあたって、このプロジェクトの持つ意味を知りたいからである。それでは A さんの語りを聴いていこう。

A さんは、ミツバチプロジェクトで次のことを学んだと話している。

「すべての生き物は、生まれて、働いて、死んでいくということです。あの中（校舎の養蜂場）で明確に現れているんです。一番印象に残っているのは、蛹から成虫になるところです。自分の力で巣から出てくるところ。感慨深いのは、私が生きて、ここにいて、あの子たちの命をお世話している。あの子たちはあの子たちで生まれて、生きて、働いて、死んでいく。なんていうんでしょう。自分たちの一生と重なります。あと、コロニー（群）での役割が人間の社会性とも重なりました。」

ミツバチは、一生のうちに、掃除-育児-巣作り-貯蜜係-門番-外勤蜂（蜜や花粉を集める）の仕事をして一生を遂げる。1 日の労働時間は 6〜8 時間ともいわれており、ミツバチの生態を知れば知るほど、人間とミツバチが頭の中で重なったようである。

A さんは生物部に所属しており、もともと生き物が好きな生徒だった。しかし、生物部で飼育している生き物からは、これほどまで生と死を意識したことはなかったという。それはミツバチの寿命がわずか 1 ヶ月であるということが関係していた。「あの子たちの命をお世話している」という言葉からも伝わってくるように、A さんにとって養蜂は、「作業」ではなく、ミツバチの一生を見守り、ミツバチを思いやる「関わり」なのだ。ミツバチの一生を、人間（自分）の一生と重ね合わせ、生と死、生きること、働くこと、集団や分業へとつなぎながら、学びを深めていったのである。

「総合実践の授業では、販売実習をするにあたって、商品の『価値』を伝えることを学び、物の見方が変わりました。この商品にたくさんの人や生き物の命が関わって、たくさんの思いが込められて、販売されているということです。はちみつも、採蜜して、瓶詰めをして、ラベルを貼って、販売するという流れは頭でわかっていたことです。だけど、実際にプロジェクトに参加してみたら、採蜜されるまでにどんな工程があって、誰がどれだけの労力をかけてハチミツが採れているのか知ることができました。」

授業では商品開発をするにあたり、大通高校で養蜂をしているという特色を含めた物語を、商

品の価値としてお客様に説明できるよう指導している。彼女はどのような物語を紡ぎ出したのだろうか。

「授業で、ミツバチ 1 匹が一生に取れるハチミツの量はティースプーン 1 杯（0.3 グラム）分なんだよっていう話を聞いて、ティースプーン 1 杯が積み重なって販売されている。ハチミツ 1 滴にミツバチの命が宿っている。それを知ってさらに商品の価値を感じました。」

A さんの場合、総合実践の授業内容だけではなく、理科や生物部で実際に自らが養蜂を経験し、生や死についてまで感じ考えていたことから、授業で我々が発していた価値という言葉に、さらに A さんなりの意味付けをしていたのだ。A さんが商品開発や販売実習に参加する目的は、お客様にミツバチのことを伝えることだった。

実際に、A さんの接客を見ていると、誰よりも詳しくミツバチの生態や、養蜂体験の中でのミツバチとの関わりが語られていた。A さんの接客法については、我々教師が教えようと思って教えられることではない。養蜂や商品開発、販売実習に自ら挑戦する中で生まれた価値を言語化して語る A さんの接客は、本物であり、多くのお客様の心を動かしていた。

A さんは小中学生の時に辛いいじめを受けていた。そのため、自分の意見を他人に伝えることが怖くなり、人が嫌いになってしまった。目の前で自分に対して笑顔で話しかけてくる人がいても、心の中では何を考えているかわからないと、人を信用できなくもなってしまっていた。そのような状況を生きた A さんが、堂々と自分の物語を語り、接客をしている。何がそのような勇気や力の獲得を促したのだろうか。

「ミツプロを大通高校で始める時って、養蜂を始める教育的効果や安全性について、地域の家を一軒一軒回って、先生方が丁寧に説明したと聞きました。いざ始めてみたら、地域の方々が養蜂のボランテイアに参加してくれたり、たまに隣の幼稚園の園児たちが見学に来たり、商品を手にとった地域の方に認めてもらったり、企業さんに商品を作る手助けをしてもらったり…。養蜂という一つの活動を始めただけで、これだけ多くの人や企業、地域全体が支えてくれて、拡げてくれるっていう。何ていうんだろう…。人がつながっていく過程をリアルタイムに感じることができました。」

「つながり」の発見である。私自身が「つながり」の一部であると同時に「つながり」を創り出す人間であることが語り出されている。ここでいう「つながり」は、安心できる関係であり、世界が拡がっていく関係なのである。このような関係があることを知り、その中で学びを深める中で、A さんは、少しずつ人を信頼することを取り戻していったようだ。しかし、それだけに留まらなかった。

「『ひとつひとつの行動に責任を持ちなさい！』って大人は言うじゃないですか。でも私たちにとっての「行動」って、大抵学校とか自分の周囲とか狭い範囲の行動なんですよ。だから結果として、何か失敗しても成功しても、学校の中だけで片付けられる。でも、ミツプロのように、いざ外に出て、地域の方々に『大通高校は養蜂をしています。商品も開発してます！』って伝えたら、意外と反響があったり、影響力を持っていて、実は価値があることやってるんだなって思って。だから『ひとつひとつの行動に責任を持ちなさい』っていう意味がなんとなくわかったんです。」

つながりには責任が伴うのである。自分にとっては些細なことでも、周囲の人との関わりで、それが大きな影響を及ぼしかねない、または、及ぼすことができると感じたようだ。大人から言われる「行動に責任を持ちなさい」という言葉が「責任」のもつ意味の獲得を促した。学校生活

から社会生活へと拡張して考え、自分なりに理解を深め、身につけはじめていることがうかがえる。

以上、A さんの語りを聴いた。彼女がミツバチプロジェクトで学び取ったことは、生きることの意味、つながりの持つ意味、そして、他者と共に生きることに対する責任である。

生きることの意味については、A さん曰く、彼女だけがこうしたことを感じ考えているのではなく、養蜂に関わる大人のボランティアさんたちもそうであった。生と死、生きること、働くこと、集団や分業について折に触れ話していたという。「私が生きて、ここにいて、あの子たちの命をお世話している」、そう語る表情はとても真剣であった。つながりの持つ意味は、養蜂に関わるうちに、ミツバチたちにとって自分が必要な存在であると認識したのだろう。そこから他者との関係へと拡張させていったのだろう。こうしたなかで他者と共に生きることの責任が自覚的に学び取られていったと考えられる。A さんは、自分が何かの誰かの役に立っているということを誇らしげに語っていた。

A さんは、どのように進路を選択していったのか。

「明確に決めたのは 2 年生の後期でした。きっかけは、経済的にも自分の心の状況からしても進学ではないなと思っていました。就職ってなった時に、いろいろ分野があるので何をしようかなとなりました。何をしていても比較的楽しいけれど、じっとしていることは苦手なので、デスクワークは向いていないと考えました。その状況は学校の状況と重なったんです。机に座ってひたすら勉強する。」

彼女は家計が厳しい一人親家庭で育った。子どもたちを育てるために懸命に働く母の姿をみて彼女は育った。そのことが進路選択にも影響している。しかし、彼女は自ら養蜂家になるという進路選択をした。

「就職するんだったら、技術を持って、何かをつくる人、人ともの、生き物、そういう仕事だったら私にもできると考えました。選択肢は陶芸家と養蜂家でした。かっこいいなって思いました。粘土とかも好きだったし、大通高校で陶芸にも触れていました。」

進路については、教師だけではなく、ボランティアの方々や学校教育に関わる大人にも相談していたという。いろんな人の話を聞きながら彼女が定めた進路選択の基準は、命あるものと実際に関わりながら、何かをつくることであった。この基準にミツバチプロジェクトで学んだことを読み取ることができる。しかし、養蜂家になる、陶芸家になる、と決めたとしても、必ずしもそうなることができるわけではない。就職活動ではその現実が突きつけられる。彼女の場合、どうであったのか。

「就職の面接のときにこう言われました。『高校生で養蜂をやりたいっていう女の子は今はいません。それだけでなく養蜂業に就く若者が少ない。それが養蜂業です。そこに君のような若い人が自分からやりたいと受けに来てくれた。あなたは貴重な存在です。だからあなたを採用します。養蜂業界という大きなくくりとしても、あなたをぜひ採用したい。』」

養蜂家募集の求人はなかった。それでも A さんは信頼できる大人と相談しながら、養蜂に関わることができる企業を探し、自ら連絡をとり、面接までこぎつけた。インターネット上にあった養蜂業者の求人条件は、「運転免許を取得していて、力仕事に自信がある男性」であった。A さんはいまその会社で働いている。

私がこの授業で目指しているのは、生徒たちに、多様な大人の価値観に触れながら、本物の体験をすることで、社会に出てからも生かせる、生きた学びをしてもらうことである。それは釧路時代から一貫して目指してきたことである。「本物」とは、商業の分野で、教育現場だからといって、商業活動の擬似体験を繰り返すのではなく、社会で働く大人たちと共に、実際の商業活動に触れて、失敗や成功を経験するということであった。

A さんの語りを聴き、私が生徒に提供してきた「本物」と A さんにとっての「本物」との違いに気づいた。彼女にとっての「本物」は、私のいう「本物」の商業活動ではなかった。ミツバチプロジェクトではないのである。

A さんのいう「本物」とは、そのような活動の土台にあるもっと根本的なものである。それは、誰かと一緒に物事に取り組むことであり、その中で経験する人に喜んでもらったり、叱られたり、対立したり、解決をさぐったりすることである。一言でいえば、人間への信頼である。

同校の生徒の多くが、家庭や学校生活の中で、人間への信頼を持てないままに、あるいは不信感を募らせたり、毀損されながら育ってきている。それゆえに、他者への信頼のみならず、自己への信頼まで奪われていることが多い。ミツバチプロジェクトにおける A さんの学びは、人間への信頼を回復させていく軌跡である。「自分もやれる」という自己効力感を自他ともに確かなものとして感じ、高めていった彼女自身の格闘の軌跡が本物なのである。

「実際の商業活動に触れて、失敗や成功を経験する」という私のいう本物は、A さんからみれば、人間への信頼を回復するための手段なのである。先に述べた私が考える本物でいう経験とは、何のためにするのか、社会に出てから生かせる、生きた学びとは、具体的にどのような力を身につけさせるための学びであるか。こうしたことについて、私は釧路時代から今まで、その意味を深めることなく実践を積み重ねてきたといえる。そのような私のいう本物は、手段としての本物であっても、目的としての本物ではなかったということである。ミツバチプロジェクトは、A さんが、人間への信頼を獲得するための、手段であったに過ぎなかったのである。

思い返してみれば、A さんのようにミツバチプロジェクトが進路選択に影響を与えたことを確認できる例は少ない。しかし、他者との関わりや小さな成功体験を積み重ねることで、自己効力感が高まり、何かを始めだした生徒はこれまでに何人もみてきた。

私は、A さんの語りから、こうした生徒にとってのミツバチプロジェクトの持つ意味について理解を深めていく出発点に立った。二つの新しいはじまりがここにある。

第 2 節　キャリア探究のアニマドーレ

本節では、2019 年（令和元）度に、キャリア探究プログラムの一つ、アニマドーレ・プロジェクトに参加した B さんの語りを聞いてみよう。私は彼女が在籍 1 年目と 5 年目に担任を務めている。ここで B さんを取り上げる理由は、私にとって気になり続けた生徒の一人だからである。

キャリア探究に参加する前までの B さんと、キャリア探究に参加して以降の B さんに分けて述べていきたい。B さんは、学校に通う目的や生きる目的さえも見失い、日々の生活に困難を抱えていた。そのような状況にあった彼女がアニマドーレ・プロジェクトに参加した。B さんが何を感じ考えたのか。彼女に訪れた変化とはどのようなものであったのか。そしてアニマドーレ・プロジェクトで彼女が何を学び取ったのだろうか。彼女の語りを聴き、理解を深めていきたい。

(1) 不登校経験者として

Bさんがキャリア探究に参加するまでの過程も紹介しておこう。

Bさんは、他の高校を辞めて同校に入学してきた在籍5年目の生徒である。4年次生までは、同校でも学校生活に馴染めず、欠席日数の合計は3桁である。決して怠惰な生徒というわけではなく、ずっと悩み苦しんでいたのだ。

Bさんは大通高校に入学した理由についてこう語っている。

「前の学校を中退した後は、就職しようと思っていました。だけど、やりたいこともないし、できることも何もなかったから、高校に入り直すことを決めました。大通高校を知ったきっかけは覚えていないけど、多分……、インターネットで検索して知ったんだと思います。最初は通信制の高校に通おうと思っていました。そこから大通高校に行きついたんだと思います。学校見学にも行かずに決めました。自己推薦入試を受験しました。でも、合格することに執着も熱意も無かったから、何も準備することなく受けに行きました。合格しても全く嬉しくなかったです。自分から受験しておきながら、学校には本当に行きたくありませんでした。」

自分がしてきたことを、どこか他人事のように振り返っている。思い出したくない過去のため、自然と記憶から抹消しようとしていたのかもしれない。前に在籍していた学校は進学校であり、毎日大量の宿題が出されていたようである。部活などに時間がとられてしまい、夜遅くまで努力したが、どうしても宿題を提出できなかった際に、教科担任の先生から「寝る暇があったらできたよね」と言われたそうだ。B さんは、人としての生活を失ってまで勉強する意味が理解できなかったという。親に体調不良であると嘘をついて学校を休んだことをきっかけにそのまま不登校になってしまった。それから学校を退学し、自分の将来にずっと不安を抱えていた。

「大通高校を知ったきっかけは覚えていないけど、多分、インターネットで検索して知ったんだと思います」という言葉からは、無意識の中でも、現状をどうにかしなければと焦り、心が悲鳴を上げていたことが感じ取れる。

私はBさんが入学してきた時の担任だった。当時は見るからに顔色が青白く、学校に登校してきてもやっとの思いで席についているという様子だった。私は「大丈夫か」という言葉をBさんに繰り返しかけていた。のちにBさんはあの時周囲からかけられた「大丈夫？」という言葉が一番辛かったと話している。周囲に心配されてもどうすることもできない自分が嫌で仕方がなかったそうだ。

「一年生の時は、全員ボランティア（当時、一年間のうちに一度は地域のボランティアに参加することを推奨していた）がプレッシャーでした。何かやらなきゃと思って申し込みはするけど、当日体調を崩して行けなくなって、結局最後まで何もできなかった。授業は、ただ時間が過ぎるのを待つだけでした。」

大通高校に入学し直したものの、特に目標を見出すこともできず、毎日時間が過ぎていくのをただひたすら我慢しながら生活していたという。それでも、なんとか取れる単位は少しずつ習得していた。2年生からは、私はBさんの担任ではなくなった。2年生から4年生は別の同僚が担任をしたのだが、B さんの話題は時々共有していた。学校での様子は変わらず、常に心配な生徒の

一人だった[7]。

「ずっと同じことを考えていました。『自分は駄目だなぁ』と自己嫌悪したり、『自分の将来はもうどうしようもないなぁ』と不安になったり、ネガティブなことばかり考えていました。親友といる時しか楽しいと感じることがなかったです。」

他校に通う親友はBさんのこうした状況を全て受けとめてくれていたという。ネガティブな考えも「別にいいじゃん」といってBさんを励まし続けてくれていた。こうした存在が一人いるのといないのでは、大きな差が生まれる。B さんが少しずつ単位を習得できたのも、こうした繋がりがあったからだろう。

「4年次生前期の終わりぐらいに、母から、父がBは、『まともに働けないだろうから、ずっと家にいさせて世話するしかない』と言っていたと聞かされました。もう両親から期待されていないのだと感じて、ショックを受けました。もう他の誰にも信用されていなんじゃないかと思って、こわくなった。その時がきっと辛い時期のピークで、このままでは死んでしまうと思いました。」

B さんのような生徒であればあるほど、親に依存して生きるしかない。しかし、いま、そうなっていること、ずっとそうなってしまうことへの不安を誰よりも感じているのはBさん自身だったのであろう。

「どうにかしなきゃと思って、でも自分の力では自分を変えられないと思ったから、環境を変えてみようと思ったんです。母にそう言ったら、『環境を変えても何も変わらないと思う』と言われました。今では後悔しているんですが、その時、『だったら、何か変えてくれるの！』と母に強く言ってしまって。母は、『頼ってくれるなら力になるよ』と言ってくれたけど、その時はもう、ただ母に自分の気持ちをぶつけるだけになってしまいました。担任の先生は唯一賛成してくれました。担任が賛成してくれたと伝えると、両親も納得してくれました。」

B さんは、自分を変えなければともがき苦しんでいた。変えられないことがまた彼女の苦しみであった。両親はBさんのことをとても心配していた。しかし、どう支えればよいのかわからなかった。当時の担任も苦しんでいた。どのようにすれば、B さんが立ち直るのかという話をよくしていた。私も苦しんだ。どうして良いかわからず悩み続けた。B さんも、両親も、そして私たち教師も、常に変わりたい、変えなければならない、でもどうしていいかわからないと葛藤していた。

B さんは休学した。彼女は東京でユースホステルの住み込みのアルバイトに行ったのである。何かが変わったのだろうか。彼女の語りを聴いてみよう。

「何も変わらなかったです。むしろ、従業員と話して劣等感が増すばかりでした。そこにいたのは、ダンサーや起業家を目指す志の高い人ばかりで、自分の小ささを目の当たりにしたんです。家に帰ってきたばっかりの時はすごくしんどかったです。」

B さんは「環境を変える」ことで変わろうと思った。それが変化の兆しであった。彼女はそれに賭けた。自ら決心し、動いた。それが東京での経験であった。その結果は「何も変わらなかっ

[7] 大通高校の特色の一つとして、毎年担任が変わるのは、着任当初は望ましくないと感じていた。しかし、このように一人の生徒について、同僚と情報共有しながら支えていくことができることを実感してからは、毎年クラス替え、担任替えの意義を自分なりに理解できるようになっていった。

た」。それどころか私自身の現状をつきつけるものであった。「しんどかった」。彼女はどうしたのだろうか。

「その時も、親友に励まされました。彼女は、『環境を変えても何も変わらないことがわかってよかったね』と言いました。確かに、思い切って環境を変えてみなかったら、後にも先に進めなかったと思う。その言葉をもらって初めて、行った甲斐があったと思えました。変わることを諦めました。人より劣っていても、弱くても、誰にも褒められない生き方でも、悪人じゃなければそれでもいいと開き直ったんです。」

自問自答を繰り返していたBさんが、その循環を断ち切るために飛び出した。そこは自分が思い描いた世界ではなかった。Bさんに現実をつきつけた。「すごくしんどかった」。

B さんの友だちは、その経験に別の見方や意味を与えた。友人の力を借りながら、東京での経験を自ら意味づけることができた。Bさんは自分自身を見つめ直すことができた。変化であった。自問自答を繰り返していたBさんが外の世界に飛び出した。彼女にとって学校は外の世界ではなかったのである。飛び出した経験の持つ意味を、友人の力を借りながら、自らを客観化した。そうすることによって世界の見方が変わった。「変わる」ことは目的ではなかった。「誰にも褒められない生き方でも、悪人じゃなければそれでもいい」と「開き直った」のである。彼女が探し始めたのは生き方であった。新しいBさんがそこにはいた。

「それからは、学校へ通うことや卒業することに執着しなくなりました。5年次の時間割は、帰ってきてすぐに担任に会いに行って作成しました。卒業することへの執着がなくなったから、時間割は何でも良かったんです。だから、担任が勧める授業を、その通りそのまま履修しました。」

Bさんにとって「変わる」ということは、学校に行くことであった。両親にとっても、私や同僚にとってもそうであったのかもしれない。学校に行くようになることが変わることである、という論理に縛られていたのである。その頸木を断ち切り、生き方を探すという目的からみれば、どの教科を選択するかということはさしたる意味はなかった。しかし、B さんに訪れた変化の兆しを担任は見逃さなかった。「B が東京から帰ってきて、別人のように雰囲気が違う」と語った。何かに挑戦させてみたいから、私の総合実践を履修させ、ミツバチプロジェクトに関わらせたり、キャリア探究に挑戦するよう進めてみようと思う、と相談に来たのである。

私はまだBさんの姿を見ていなかった。不安な気持ちもあったが、「是非お願いします」と伝えた。こうして、B さんの 5 年目の高校生活が始まった。私は担任として、そして授業担当者としてBさんと出会い直すことになった。

(2)　Bさんにとってのアニマドーレとは？

同僚が言っていた通り、B さんは顔色もよく、以前の暗い面影はなかった。それどころか、これまでとは別人であるかのように、みるみる成長し活躍したのである。B さんは様々な重圧からも解放され、我々の「やってみないか」という言葉を受け止めることができるようになっていた。B さんは 5 年目の一年間で、ミツバチプロジェクト、アニマドーレ、チャレンジグルメと次々に挑戦していったのである。Bさんはこの年一度も学校を休まなかった。

ここからは、キャリア探究プログラム「アニマドーレ」に参加した感想を聞いて、B さん自身が何を感じ考えていたのか理解を深めよう。

「私は、オリジナル商品の開発のために商品開発について学び、仲間と協力して、オリジナルのトマトピクルスを開発しました。また、生産者の生き方や農業に対する思いを知るため、札幌市近郊の農家さんを訪問する農家バスツアーにも参加しました。･･･。時に仲間をサポートする立場として、時にまとめ役として、また、与えられる側にも与える側にもなりながら、これらの活動を通して、私は多くのことを学びました。」

Bさんの口から「仲間」という言葉が出たことに驚いた。1年生の時からBさんが誰かと何かを一緒にしていることを見たことがなかったからだ。しかしBさんは、他のプロジェクトに参加した際も、「いつの間に、私は一日をこんなに楽しく過ごすことができるようになったのかと思いました。いつの間に、私は他人と協力して物事を成し遂げられる明るい人間になったのかと思いました」と語っている。Aさんとは違ったかたちではあるが、Bさんもまた学習活動を通して「つながり」を発見しているのである。

これまでのBさんの様子を見ている限りでは、他者と協働したことがないようには見えなかった。しかし、そういうことができる力をもともと持っていたと考えられる。その力をBさんに見失わせ、奪い、忘れさせていたのが、不登校という経験だった。B さんの少し前までの状況を知らない人から見れば、そこに居るBさんは、リーダーシップのある高校生にしか見えなかっただろう。

B さんはプロジェクトの中で、何かを人から単に教わり続けたのではなく、活動の中で「与えられる側にも与える側にもなりながら」と語るように、本来持っていた力を発揮していった。

「アニマドーレの農家バスツアーで訪問した生産者のたった一言で、『英語を学びたい』と思ったり『仕事』についての価値観が変わりました。人は皆それぞれ異なる人生で異なる体験をし、違った考えを持っています。誰からどのように影響を受けるかによって、人生が変わることもあるかもしれません。私は初めて、一つ一つの出会いの価値を実感しました。」

Bさんは英語と出会い直した。前籍校で「寝る暇があったらできたよね」と言われた宿題は英語だった。宿題をやらなければいけない意味が見出せなかった。アニマドーレの活動の際に生産者のFさんから言われた「たった一言」は「日本基準で考える時代じゃない」であった。Bさんは、「日本の内側だけを見ていては勿体無い、世界はとても広い、日本にはない物や人、考え方が海外には沢山ある」と思った。

東京に飛び出した経験がそこにはあったのだろう。視線を海外へ向けたとき、「言葉」という高い壁を感じた。初めて自らの意思で英語を学びたいと思ったという。英語は新しい世界への入り口であった。生き方を実現する方法であった。英語は宿題ではなかった。

私たち教師は生徒たちに日々様々なことを伝えようと努力している。同じ内容でも、言葉を変え、語り手を変え、場所を変えることで、生徒の心に響くことがある。Bさんの語りが教えているのは、「本物」の言葉とは、借り物ではない語り手の心と身体をくぐった言葉であるということである。Fさんの言葉は生産者としての喜び、悲しみ、苦しみ、楽しみが刻み込まれている。そして聴き手であるBさんは、彼女なりの艱難辛苦を経ていま真剣に生き方を探している。Bさんの言葉は、学びたい、感じ取ろうという姿勢、構えである。互いの言葉が共鳴した。

両者には本物の言葉があった。本物の学習活動における言葉がここにはあった。おしゃべりの言葉ではない。対話の言葉でもない。「生き方」をともにつくる言葉である。Bさんが語っている「一つ一つの出会いの価値」とはこういうことなのであろう。食農体験プログラムに参加して、

まさか英語を学びたいというきっかけを得るとは思っていなかったであろう。私はなおさらそうであった。

キャリア探究では、大人に裏切られて心に傷をおった生徒たちが、新しく出会った大人にその傷を癒してもらうという場面をよく目にする。こうした大人との出会い直しからも、「人って捨てたもんじゃないな。信じてみようかな、頼ってみようかな」という思いが芽生え、その思いはやがて、「私もこんな大人になりたいな」というかたちで生徒たちの心の中にあらわれている。

「少し前まで、私には、生まれ育ったこの地域への執着や思い入れといったものがありませんでした。私にとって『地元』『札幌市』は、単に生まれ育った『場所』でしかなかったのです。しかし、今は、この地域に貢献したいと思っています。それは、『価値』を感じる出会いを、この土地で経験したからです。この地での体験と、ここにいた人たちとの出会いがなければ得られなかったものが沢山あります。そのような体験は、この地域への強い思い入れとなり、そして、私が生まれ育った土地は素晴らしいところなのだという自信になりました。素晴らしい土地は日本中・世界中にあると思いますが、私がその素晴らしさを、自信を持って語ることができるのは、この札幌だけです。」

B さんは、様々な農業体験、商品開発やバスツアーを通じて自分が住む札幌の価値を発見している。少子高齢化、東京一極集中が進み、地域社会の解体が進んでいる。地方創生が政策的な課題となる中で、自分の住むまちや地域の課題を取り上げた学習が求められている。アニマドーレはそうした学習活動を具体化したものの一つである。B さんの語りは、そのような地域と連携した学習活動が成立するために必要な要素がどこにあるかを教えている。

「地域貢献のために何ができるか考えましょう」という学習活動では不十分なのである。地域の人と連携するだけでは不十分なのである。これらはすべて手段の一つである。手段はどこまでいっても手段である。それ自体が目的、例えば、地域の担い手の育成になることはない。なぜ、連携するのか。そのことの持つ意味を徹底的に考えなければならない。

B さんにとって、札幌は生まれた場所にすぎなかった。それが「貢献したいと思っている」場所であり「その素晴らしさを、自信をもって語ることができる」場所となっている。意味づけが変わっている。何がそうさせたのか。アニマドーレにおける学習体験を積めばそうなるのか。F さんのような大人と連携すれば B さんのようになるのか。いずれも確証はもてない。

B さんに学び直す必要があると私は思う。札幌の意味がなぜ変わったのか。変えたのは B さんの中にある「生き方」への問いにあると考える。F さんのたった一言には F さんの「生き方」への問いが刻み込まれている。世代や立場などさまざまな違いは違いとしてあるものの、いま、ここを生きる者としての語りである。B さんは、自分と同じように「生き方」を問う者が札幌にいることを発見したのだろう。どこへ向かえばよいのか、そのためにどうすればよいのか、と同じ問いを発している者がいる。どこで問いを発しているのか。札幌であった。住む場所であったのが生き方を問い、つくる場に変わったのである。

B さんは、「生き方」という問いを発見することにより、新しい自分となり、F さんとつながった。F さんとつながることによって、彼女は、一方で、世界とつながる入り口を見つけ、他方で、世界を見渡しながらも、いま、ここ、札幌で生きることの意味を創り出したのである。地域と連携した学習において必要になるのは、連携相手もさることながら、いま、ここで、この場を生きることの意味を、ともに考えるということではないだろうか。ともに、ということはその地域の人を意味するだけではない。「素晴らしい土地は日本中・世界中にあると思います」と B さんは

語っている。地域と連携した学習が陥る一つの罠は、学習を通じて発見された地域資源や形成された地域像が、その地域のすばらしさを仲間内で称賛することに留まってしまうことにある。B さんの語りを聴くとき、札幌は彼女にとってかけがえのない場所となったことがわかると同時に、人間にとっての地域の持つ意味、札幌から遠く離れた見たことも聞いたこともない地域に住む人のことを理解する力の萌芽を認めることができると考えられる。

人は地域で生まれ、育つ。そこを離れたとしても、また別の地域の中で生きていかなくてはならない。B さんの語りは改めて地域や自分のまちについて考えることの持つ普遍性を教えている。

「学ぼうという意識さえあれば、無意味なことなど一つもない」と B さんは言っている。我々の仕事は、そのことが可能であることを示すことにある。

第 3 節　チャレンジグルメと地域

B さんの語りには地域の再発見を読み取ることができる。しかし、B さんの語りの中心は「生き方」の発見にある。この節では、地域との関係に焦点を絞って考えてみたい。そのことを教えてくれるのがチャレンジグルメの実践である。本節では、2018 年（平成 30 年）第 6 回チャレンジグルメコンテストに出場した北海道羅臼高校（以下 羅臼高校）3 年生の C さんを取り上げる。C さんを取り上げた理由は 2 つある。

第一に、羅臼高校の生徒だからである。羅臼高校は我々実行委員会が目指していた「地域と一丸となって参加できるコンテスト」というコンセプトを一番初めにかたちにした高校である。初年度である 2012 年（平成 24 年）からこのコンテストに参加している学校である。

羅臼町は、世界自然遺産知床半島の東側に位置しており、自然豊かで漁業の町として繁栄してきた。近年は、主要産業である漁業の低迷が町の課題となっている。羅臼高校の生徒たちは、全員が羅臼で育った子どもたちだ。美味しい魚介類は、生徒たちにとっては当たり前だが、その価値を発信する機会はほとんどなかった。そこで羅臼高校は独自で 2013 年（平成 25 年）度から、地域活性化を目的とした「創作料理プロジェクト」を行っていた。

第二に、C さんは第 6 回コンテスト出場生徒であるということだ。この年、事務局の私のもとへ羅臼高校の先生から一本の電話をもらった。「今年はもしかしたら一次審査のエントリーにメニュー開発が間に合わず出場を見送るかもしれません」という内容であった。しかし、コンテスト当日には見事予選を通過して、本戦で優勝を果たしたのだ。なぜ出場できたのか、なぜ優勝したのか。最後のステージで C さんが話した挨拶が心に残っていた。それでは C さんの感想を読み解いていこう。

羅臼町で生まれ育った C さんは、将来は調理師になるという目標を持っていた。2 年間、創作料理プロジェクトメンバーとして活動してきたという。3 年生になった C さんは、創作料理プロジェクトリーダーになった。大賞を目指して努力したのである。

「メニュー作りが始まり、順調に決まりそうでしたが、コストや大量調理という点で、実現が難しいことがわかり、メニュー作りの大変さを実感しました。そんな時に、漁業協同組合の方から『今年はニシンが大量に獲れているよ』と教えていただきました。ニシンは、小骨が多く臭みがあり調理するにはとても難しい魚でした。そこで、ニシンをミンチにしました。ビジネスホテル漁火の中村二郎さんにアドバイスをいただき、最終的にご飯とニシンや野菜を混ぜてパン粉をつけて揚げることにしました。こうして、『らうすコロッと飯』ができました。」

大通高校の生徒たちも含め、チャレンジグルメに参加する生徒たちは、はじめは学校祭の模擬店の延長のような気持ちで参加してくることが少なくない。なんとなくインターネットで地域の特産品や料理レシピを調べてメニューを考案するのだ。そのため、コンテストに出品するためのレシピを実際に考案し始めると、いくつもの壁に突き当たる。お金をかければ美味しいものができるのは当たり前である。しかし、売価を意識しながら原価を考えていく作業や、どこから特産品を仕入れるか、保健所の指導によって、どこで食材を加工するかなど、様々な規制を解決しながら一つのレシピを創りあげる。食品を扱うとはそれだけ責任を持たなければいけないことであり、学校祭の模擬店のようなイベントとは違うのである。

出場6年目の羅臼高校は、Cさんが参加する6回目の時点で、地域連携の地盤が固められていた。そのため地域から寄せられる期待は大きかったと思う。この年の羅臼高校のように、地域からの提案を高校生が形にするという流れは簡単そうに見えてなかなか難しい。

このような学習活動の場合、高校生が地域の資源を調べて、見つけたものを自分たちにできる範囲で形にすることが一般的である。地域との連携関係は、高校生の活動を支えるところに重点がある。しかし、羅臼高校の場合、地域から寄せられた課題や要望に応えることが商品開発に課せられている。

高校生が自分たちの創意工夫をこらしながら商品開発をすすめることは同じではあるものの、その商品は自分たちが満足できればよいというものではなく、地域課題を解決することに資するかどうかという点に重点が置かれるからである。そのためには、お互いの活動の意義を理解し合い、ときには厳しい意見交換もあるがゆえに、強固で深い信頼関係がなければならない。漁業組合からの連絡や、ビジネスホテル漁火の中村さんによるアドバイスは、こうした関係として理解しなければならない。羅臼高校は5年間かけて、こうした関係を地域と創り上げていたのだ。Cさんの感想文からは、こうした羅臼高校の実践の積み重ねと地域の期待を一身に背負っていたことが伝わってくる。

Cさんは地域の期待に応えるために試行錯誤を繰り返した。

「9月には、町内試食会を開催し、数の子とソースを中に入れてみては、とアドバイスをもらいました。実際にやってみると、とても手間がかかり大変でしたが、凄く美味しくなりました。本選が近づいてきた頃、私たちのために地域の方々が応援ソングや応援メッセージを作ってくださいました。」

レシピの考案から始まり、試食段階に突入しても、地域の方々の協力は常に継続されている。羅臼高校の生徒がチャレンジグルメに参加することを応援するのではなく、羅臼町としてチャレンジグルメに挑むのである。コンテスト当日は羅臼町から多くの地域の方々がバスに乗って応援に駆けつけた年もあった。Cさんはコンテストにどう挑んだのか。

「プレゼン審査は、私を含め5人全員で挑み、それぞれの持ち味を生かした発表をすることができました。最後の一言は、創作料理プロジェクトへの思いを私が言いました。結果は、私の目標であった『大賞を取って舞台に上がりたい』という目標が達成できました。嬉しい気持ちで胸がいっぱいになり、最後の一言がうまく言えませんでした。賞をとれたのは地域の方や羅臼高校生の応援と協力があったからこそだと思っています。協力してくださった方には本当に感謝しています。」

チームの仲間や多くの地域の方々と勝ち取った賞の価値は誰よりもCさん自身が感じていたのではないだろうか。「最後の言葉がうまく言えませんでした」と書いているが、Cさんはステージ

上でたくさんの涙を流し、マイクを強く握りしめながら、仲間や先生方、関わってくれたたくさんの地域の方々への感謝の思いを述べていた。

Cさんは羅臼町の方々と関わりながら活動することで、自分たちの生まれ育ったまちの価値に気がつき、まちに誇りを持った、と語っていた。これは、アニマドーレに参加したBさんの語り――「私が生まれ育った土地は素晴らしいところなのだという自信になりました。素晴らしい土地は日本中・世界中にあると思いますが、私がその素晴らしさを、自信を持って語ることができるのは、この札幌だけです」――とかさなる部分が多い。しかし、私がCさんの感想文から感じ考えたことはそれだけではない。Cさんの文章の背後にある羅臼町の大人の声が聴こえるということなのである。

羅臼高校は地域に応援されるだけではなく、地域と一体となってコンテストに望んでいる。学校教師が、「応募締め切りに間に合わないかもしれない」という不安を抱えていた時も、町の教育委員会や漁業協同組合の方々から手厚い支援をいただいたと聞いている。

詳しく調べてみると、まちの人たちは、地域に諦めの思いを抱いていたそうだ。子どもたちはこの活動を通して、大人のそうした思いにも触れたのではないだろうか。そして、そこから自分たちにもできることを探し出し、行動に移したのではないだろうか。かくして、羅臼高校がチャレンジグルメに挑むのではなく、羅臼町が挑むという、羅臼町ならではの、地域連携学習が成立したのである。それぞれの立場や利害を超えて地域の課題に挑むという地域との一体感に、羅臼高校の実践の価値があると思うのだ。

大人たちの悩む姿を間近に見ながら羅臼の子どもは育つ。そこには自分たちの親の姿もある。だから、期待に応えたいという生徒たちの力が生まれる。努力する。学ぶのである。

羅臼から飛び出し、チャレンジグルメに挑戦するのである。その生徒たちの姿を地域の大人は目の当たりにする。自分たちにできることはないかと考える。自分にできなければ、誰かいないかと探す。こうして大人たちが自分たちの地域のつながりや価値を再発見していくのである。

町の教育委員会には、数年前から「高校生チャンレンジグルメコンテスト担当」が設置され、異動により引き継ぎに不安のある学校事情を、外からサポートしているそうだ。こうした動きは、私にとって自分の職場で地域連携を推進する上で大変参考になっている。

現在に至るまで、羅臼高校は、地域と一体となってコンテストに挑み、大賞受賞 4 度、準大賞 1 度という素晴らしい成績を収めている。

人とのつながりは、まちの規模に関係なくそこに住む人々との関係で決まってくる。羅臼町はそのことを私たちに教えてくれた[8]。

C さんから私が学び取ったことは以下の 2 点となる。第一に、大人と子どもとの関係が学習活動の質を決める。第二に、地域連携学習で大事なことはこうした地域の再創造にある。大人と子どもがともに手を携え、地域課題に挑む中で、地域の価値や自分たちの存在の持つ意味について理解を深めていくことが、地方創生につながっていくのではないか。学校には、学習活動を中心にして、大人と子どもとの関係をつくるだけでなく、両者の関係を質的に高めていく役割がある。

[8] ある日、札幌の居酒屋で羅臼漁協の方に出会った。私は、チャレンジグルメを知っていますかと質問してみた。「いえ、知りません」という返答を予測していたが、帰ってきたのは「知っているもなにもまちをあげて出場している大会だよ！」という言葉だった。

「なんだか諦めていた地域が元気になったね」――――羅臼高校の生徒が大人たちに語らせた言葉である。これに勝る大賞を今の私は知らない。

おわりに

令和4年から高校でも新学習指導要領の本格実施に伴い、全国の高校で探究的な学習の実践が展開されている。さらに、テクノロジーの進展により、チャットGPTなるものが登場し、今後加速度的に学びの形態が変化することが予想される。それに伴いますます今後求められる教師の役割も変わっていくだろう。

これまで紹介した私の実践とは、「表」に質的に変化していった本物の体験があり、「裏」には、実践の質的変化を一緒にもたらしてくれた、実践を支えるコミュニティが存在した。特にこれから自分の役割として、力を入れて行かねばならないのは「裏」の部分である。5年前、自分の教師としての「北極星（vision）」（以下、「北極星」とする。）を見つけ出し、いかに今の自分になってきたのかを捉え直す機会を得た。見つけ出すために、本気で手を貸してくれた人がいた。答えを示すのではなく、自分で見つけ出すことをひたすら待ち続けてくれる人がいた。応援してくれる人がいた。見つけ出すのに長い時間を費やした。完全に自分を俯瞰して見つめ直すことは難しかった。挫折しそうにもなった。しかし、知りたかった。そんな自分を信じて待ってくれる人がいた。長い時間待たせてしまった.....。

私が見つけ出した北極星は、始めて目にするものではなかった。初任時代から口にしていたものだった。「本物の体験」だった。しかし、私が感じ考えてきた「本物の体験」の意味と、「北極星」として浮かび上がった「本物の体験」の意味は質的に違った。私はこの言葉と改めて出会い直すことができた。言葉と向き合うとはどういうことかを、自らの実践を言語化することで学んだ。「本物の体験」の持つ意味にたどり着くために、私を助け、案内してくれたのは、これまでに出逢いし生徒たちであり、同僚たちであり、私の実践を支えてきてくれた多くの人々である。その裏付けは全て自分が行なってきた実践の中にあった。私は初任時代、生徒たちに、擬似体験ではない、「本物の体験」を通じて、社会の仕組みや問題・課題に直面することにより、生徒たちが高校卒業後も社会で活躍する構えをつくってほしいと考えていた。私にとっての「本物の体験」とは、ビジネスや社会の実際を教育現場に取り入れることだった。大学院での学びを終えて気がついたことは、「本物の体験」の持つ意味がもっと深く、尊いものであったということである。それは、他者への信頼と自己効力感を高めること、自分のことを知りながら他者を知ることができること、他者を知ることで自分を知ることができる学びである。一言でいえば、人とつながり、生きること、生きていく力を身につけていく学びのことであった。この力を身につけることは、大人と子どもとの関係をつくるだけでなく、両者の関係を質的に高め、地域を再創造することでもあった。私の「北極星」は、いつもそこにあった。「北極星」を見つけるとは、私自身のものの見方、考え方、捉え方を変えることだった。

1.「教育の私事化」とそれに伴う「機会格差」

不登校、いじめ、貧困、子どもや若者を取り巻く現状がとても不安定である。生徒たちはこの先、幸せな人生を歩んで行けるのだろうか。公教育に関わる一人として私は、社会の変容をどの

ように捉え、そこに起因する問題をどのように解決していけばよいのだろうか。

これまで生徒たちの様々な問題・課題と直面してきた。生徒の多くは、問題・課題を多く抱えていた。そこから抜け出そう、自立しようとするが、自立するために活用できる資源が実に乏しい環境を生きている。自立しようとする意欲までも奪われてしまっていたのである。日本の子どもの７人に１人が貧困と言われている。他人事ではない。職場ではそれをもろに突きつけられた。貧困は、自分への信頼のみならず、時間や他者への信頼、社会とのつながり、そして将来への希望まで奪い取る。初任時代からこの状況は変わらない。負の連鎖を断ち切ることができていない。「人を信頼できない」「将来に希望をもてない」「死にたい」。この言葉を生徒から聞くたびに胸が苦しくなった。そうなってしまった原因はなんなのだろうか。

はっきりしていることは、目の前の生徒たちに責任がないということである。では、保護者が悪いのだろうか。いや、それも一概にそうとは言えない。では、それを取り巻く社会が悪いのだろうか。きっとそうだ。社会が悪い。しかし、社会をつくっているのは誰だろうか。それは私たちである。国が悪い。リーダーがよくない。政治が悪い。人に責任を押し付けることは簡単である。しかし、他人事にしていては何ひとつ解決しないことをこれまで何度も実感してきた。誰もが導き出せる「社会が悪い」という答えのようなものは、なんの意味も持たない。ではどうすればよいのだろうか。家庭環境が複雑な場合、精神的な発達のバランスが崩れている。子どもたちが成長し、自立する条件そのものが揃っていなかった。自分たちの子どもだけがよければいい。誰にも頼ることができない。「教育の私事化」は、貧しい親や子どもたちだけの問題ではない。裕福な親や子どもたちにも、それぞれに問題・課題を突きつけている。この状況を改善しないことには社会をつくることそのものが難しいのである。

2. 学校は何ができるか

居場所という言葉には二つの意味がある。一つは、心安らげる場所であり、もう一つは、活躍できる場所である。生徒たちが、後者の意味の居場所を見つけ出していけるようにするためにも、まずは「心安らげる場所」が必要である。オルデンバーグは、「人生を豊にする場」「生きる意味を獲得する場」「他者と共に生きることに責任を持つことを学ぶことができる場」が必要であることを教えてくれた。それが彼のいう「サード・プレイス」である。生徒たちとの会話から、家庭が心安らげる場所になっていないと感じることがある。では、学校を「サード・プレイス」にすればよいのだろうか。そうではない。「サード・プレイス」という概念から、学校という場や学習活動という場のあり方やつくり方を学ぶのである。学校という場が、活躍できる場所である前に、生徒にとって、心安らげる場所にするのである。ときに、「サード・プレイス」という概念が支えになることも学んだ。それは、生徒一人 ひとりの存在を受け止めることである。受け止めて送り出し、また戻ってきたら温かく向かい入れることである。

さまざまな大人とつながりながら教育活動を展開していくことは、生徒たちだけのためではなかった。大人たちの不安を取り除くことでもあった。大人も深刻な問題をたくさん抱えていた。今の社会では、子どもからも、大人からも心安らげる場所が求められていると考える。

3.「本物の体験」とそれを支える他者との関係

実践を重ねる中で、私の考えていた「本物の体験」は変化していった。その変化を辿り直してみたとき、なぜ起こったのかを理解することができるようになった。私が教育の中にビジネスの実際を取り入れようと試み始めたときから現在に至るまで、その実践に参加した生徒、それらの実践を共に支えてくれた同僚や他者との関係が､各実践に質的な変化をもたらしていたのだった。初任段階では、教材研究に物足りなさを感じ、外部の企業と連携することで、その物足りなさを払拭しようと試みた。しかし、外部企業と連携することは当時まだ敷居が高く、うまく実行に移すことができなかった。「学校が一企業と教育実践をするのはあまり好ましいことではないのですよ」と管理職に言われた言葉は今でも忘れられない。当時の同僚たちも外部との連携の必要性はあまり感じていないようだった。私もその場では「そういうものか」と諦めてしまった。

大通高校に着任してからは、ビジネスや社会の実際を授業や教育活動に取り入れること、多くの学習プログラムをつくり上げていくことに夢中だった。この当時の私が感じ考えていた意味のある教育とは、社会で生きていくために問題や課題を解決していける力を身につける学習であった。そのためには「本物の体験」が欠かせなかった。ここでいう「本物」とはビジネスや社会の実際であり、「体験」とはこうした学校外の専門家と触れ合いながら学ぶということであった。しかし、自らの実践をじっくりと省察したことで、この実践の意味と出会い直した。

ミツバチプロジェクトに参加した A さんが私に教えてくれた。A さんにとって、ミツバチプロジェクトにおける本物の体験は、他者（人間）への信頼を回復させたり、自分もやれる、という自己効力感を自他ともに確かなものとして感じ、高めていくことだった。ビジネスや社会の実際を学ぶことは A さんにとって目的ではなかったのである。高校生が本気を出せば、大人も本気になり、大人の本気を感じれば、高校生もそれに本気で向き合うのだということを学んだ。ミツバチプロジェクト段階では、学校内外に学びの協力関係を拡張させることができることを実感していった。プロジェクトに関わっていた生徒たち、教師、携わった地域の大人が一緒に学び合う関係を学んだ。

アニマドーレでは、プロジェクトに参加した B さんから学び直すことができた。B さんの中にある「生き方」への問いが、彼女の地域（札幌）の意味を質的に変化させた。B さんは、生き方という問いを発見することにより、新しい自分となり、生産者とつながった。B さんにとっての「本物の体験」は、人とつながることであり、地域で生きる意味をつくり出すことであった。忘れかけていた自分、新しい自分と出会い直すことであった。B さんの語りを聴く中で、私自身も自分の内なる声を改めて聴くことができた。「地域に貢献したい」「次代を担う若者に、食や一次産業についてもっと興味関心を持たせたい、学ばせたい」という声である。二つの声を聴く中で、札幌にある学校で働く教師としての私と、地域（札幌人）としての私が結合したのである。こうした経験を、日常的に繰り返すことで、札幌という地域で働く教師、そして大人としての自覚が芽生えたのである。

チャレンジグルメコンテストでは、C さんから学んだ。本物の体験の持つ意味は、大人と子どもとの関係が学習活動の質を決めることであった。地域連携学習で大事なことはこうした地域の再創造にあることであった。大人と子どもがともに手を携え、地域課題に挑む中で、地域の価値や自分たちの存在の持つ意味について理解を深めていくことが、地方創生につながっていくので

はないかということに気がつかされた。学校には、学習活動を中心にして、大人と子どもとの関係をつくるだけでなく、両者の関係を質的に高めていく役割があった。将来に希望や可能性を持つ、社会をつくる人材を育むことができるのである。チャレンジグルメの事務局を運営しながら、普段、別々の場所で働くもの同士でも、理念を共有することが出来れば、それぞれの強みを持つ機関といろんなかたちで関係を構築することができることを経験した。私は、それまでの調整やまとめ役に留まらず、物事を組織し、主催できる力を高めていかなければならなくなった。チャレンジグルメの実践を支えてくれている人々との出会いが、このように、もっと成長したいと思う「私」に出会わせてくれた。

4.「本物の体験」を創出する教師には何が求められるか

この先どのような教師が求められるのだろうか。はっきりと言えることは、教師がなんでも知っていて、子どもたちに全を教えることは不可能であるということだ。社会は複雑で予測がつかない。現在もなお世の中を脅かす出来事が起こり、ここ教育委員会でも日々対応に追われている。変動が激しく、不確実で複雑であり、そして曖昧である。この時代に教師として生きるには、これまでもそうであったように、「本物の体験」を教育に取り入れていくことが必要と考える。ただし、この「本物の体験」の持つ意味は、時代の流れによって変化し続けるだろう。何が「本物」なのかに常に向き合い続けなければならない。何が「本物」なのかを見極め、確認するには、一人ではなく複数人、同じ職種、立場、世代の複数人ではなく、多様な人々の力が必要になる。つまり、これまでの実践同様、他者との関係の構築が必要なのである。

5 年前、生徒の声に耳を傾けられる教師でありたい。生徒の声に耳を傾ける大人を学校に引きつける教師でありたいと私は綴った。今はそうした学校や教師を支える役割を担える人物になることを目指して、日々自分と向き合っている。

子どもの学習活動を中心として、大人と子どもがともに学び合うことができる場をつくり、公教育に必要な「本物の体験」を創り出す教育者でありたい。現時点での私の到達点である。

【参考文献】

岩川直樹・伊田広行編（2007）『貧困と学力』明石書店

ウェンガー,E他（櫻井裕子訳）（2002）『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社

オルデンバーグ,R（忠平美幸訳）（2013）『サードプレイス～コミュニティの核になる「とびきり居心地の良い場所～」みすず書房

グッドソン,A他（高井良健一他訳）（2006）『ライフヒストリーの教育学実践から方法論まで』昭和堂

グループ・ディダクティカ編（2012）『教師になること、教師であり続けること』勁草書房

小出達夫（2019）「教育と公共性（8）：市立札幌大通高等学校の教育改革」『公教育システム研究』第 18 号、北海道大学大学院教育学研究院教育行政学研究室・学校経営論研究室、47-82 頁

佐宗邦威（2019）『直感と論理をつなぐ思考法』ダイヤモンド社

鮫島京一（2013）「進学動機と教師との出会いについての臨床教育学的研究―ある青年の小学校・中学校時代の『語り』を中心に―」『教育システム研究』第 9 号、奈良女子大学教育システム研究開発センター、23-46 頁

鮫島京一（2018）「『イライラ』感情の持つ意味についての臨床教育学的研究―中学校における『自己効力感』の質的変化に焦点を据えた生徒指導―」『教育システム研究』第 13 号、奈良女子大学教育システム研究開発センター、363-384 頁

鮫島京一（2019）「高等学校における『自己指導能力』を形成する生徒指導についての臨床教育学的研究～ある生徒の高校時代の『生活史』の語りを手がかりに～」『教育システム研究』第 14 号、奈良女子大学教育システム研究開発センター、32-64 頁

菅谷朋子（2003）『未来をつくる図書館～ニューヨークからの報告～』岩波新書

センゲ,P・M（枝廣淳子・小田理一郎訳）（2011）『学習する組織』英治出版

田中孝彦（2003）『生き方を問う子どもたち～教育改革の原点へ～』岩波書店

田中孝彦（2009）『子ども理解～臨床教育学の試み～』岩波書店

眺野大輔（2016）『これからの高校の在り方を模索して探究的な学びに真っ向から挑んだ高校改革の奇跡』 学校改革実践研究報告書 No.251

西野功泰・杉山晋平（2015）『ミツバチプロジェクト報告書』No.1

西野功泰 他（2017）『ミツバチプロジェクト報告書』No.2

パットナム,R・D（柴内康文訳）（2017）『われらの子ども～米国における機会格差の拡大～』創元社

マイヤー,D（北田佳子訳）（2011）『学校を変える力～イースト・ハーレムの小さな学校～』岩波書店

松岡亮二（2019）『教育格差　階層・地域・学歴』ちくま新書